

335-259

53

文學士樋口秀雄著

社會學小史全

東京 二松堂發行

明治
44. 8. 12
丙寅

序

社會に關する研究は人類の思想史と共に古くから存して居る。しかしそれは社會萬般の事原に關する特殊な研究、もしは斷片的知識に過ぎぬ。社會學なる名稱の生じてからは今に至るまで僅かに七十年。學齡に於ては未だ幼稚であるが、諸般の社會的科學の進歩の後を受けて、科學的知識の旺盛な時代の潮流に乗じた爲め、斯學の進歩は我が現代の日本の進歩の如く、極めて急速で且つ赫々たる成效を示しつつある。凡ての知識が終局に於て哲學の門に詣すると同様に、一切の社會的科學は皆斯學の原理原則にその根柢を求めんとしてこれに歸依する様になつて來たのである。

かくその進歩は著しいが、その學齡の若いだけに、未だ全般の問題に涉つて悉く完璧に近づきつゝあるとは云はれぬ。未開の領域は少くはない。學問としての體系も未だ一定しては居らぬ。恰かも列強對立の有様で、説くものに由てその體裁も違ふ、立脚地も異なる。隨うて一部や二部の書を讀んでも、斯學大體の傾向や中心問題を知るには充分でない。是に於てか一方には古來の社會研究の大勢と斯學成立の因縁や必要を熟知し、他方には現代に於ける斯學研究の大勢を通覽しなくては、充分に斯の學を解することは出来ぬ。社會學の歴史の必要は即ちこゝにある。そして今の時代に於て特にその必要を感じる。

然るに社會學の歴史を叙したものは、歐米に於てすら未だ極めて少ない。否、社會學的諸科學の史はあるが、社會學そのもの、歴史は殆んどないと云うてもよい。適ま二三の叙述はあつても、或は部分的であり、或は偏して居る。日本に於てはなほさらである。

この現状と必要とに鑑みて、予は淺學ながら社會學史の叙述を思ひ立つてから既に數年を経たが、代表的學者の學説を稍や詳細に述べ様と思ふため、まだ四五の學者の學説を叙したに止まつて、その大成にはなほ數年の歲月を要する有様である。しかも時代の必要は予の事業の大成を俟つを許さない。そこで先づ社會學の研究の由來と大勢とを叙し

た小史を公刊しやうと思ひ立つたのである。その結果として生じた産物が即ち此書である。片々たる小冊子、固より社會學説の詳細を傳へるには足らぬが、斯學研究の現状を理解し、その傾向を知るに於ては専門家以外の人々に對して些か餘師たるに足るべきを信ずる。

明治四十四年夏七月

白山御殿山房に於て

龍

峽

附記す。本書の由來は此の如くである。予の淺學なる萬一の遺漏と誤解の絶無を保つ難し。高貴を賜らば、ひとり予の幸のみではない。

社會學小史目次

序論	一	
第一章	古代に於ける社會學的研究	六
第二章	中世に於ける社會學的研究	一六
第三章	近世に於ける社會學的研究	二三
第四章	社會學成立の因縁	三五
第五章	オーギュスト・コムト	四三
第六章	社會學の學派	五五
第七章	社會の生物的考察	七五
第八章	社會の心理的考察	九四
目次			一

其一、社會の根本現象の研究……………九四

第九章 社會の心理的考察……………一一四

其二、社會意識の研究……………一二七

第十章 社會學研究の現状……………一四三

附 錄 社會化論梗概……………一四三

目次終

社會學小史

文學士 樋口 秀雄、著

序論

社會學の建設
 社會學の體系
 社會學の歴史

社會がコムト(Comte)の實證哲學體系(Cours de philosophie positive)の一部として建設せられて以來未だ百年に至らぬ。社會學の學齡は極めて幼弱である。尤も他の科學の進歩の結果と、學術勃興の氣運とを享けて、その進歩は實に駸々たるものであるけれども、社會學の體系に至つてもなほ未だ定まつた形ちが備はつたと云ふことは出來ない。従つてその歴史を叙する人も亦甚だ少ない。コムトがアリストテレスの政治學、モンテスキウ及びコンドルセーの學說の中に、社會に關する學術的考察の淵源を探り、併せて社會的科學の現狀に説き

及びし以來、グムプロキチ (Gumplovicz) が其著「社會學綱要」(Grundriss der Sociologie) に於て、ワード (J.F. Ward) が其著「動的社會學」(Dynamic Sociology, Vol. I.) に於て、ルードキヒシタイン (Ludwig Stein) がその著「哲學より見たる社會問題」(Soziale Frage im Lichte der Philosophie) に於て、スモール (Albion Small) がその近著「一般社會學」(General Sociology) に於て及び建部氏がその著「社會學序説」の中に社會學の史を序してあるけれども、ワードはコムト及びスペンサーの説を叙したるに止まり、シタイン及び建部氏はコムト以前の哲學及び社會的科學の中に社會學的研究の源を探るに専らであつて、その現狀に就ては唯人名を列擧し、數言を附するに過ぎない。スモールはコムト以後に専らだけれども、唯大勢を社會學の問題に關して大觀せしに止まるのである。ひとりグムプロキチはコムト以下の學説を比較的詳細に叙したけれども、時未だ早くして、コムト、スペンサー、シエフレ、リ、エンフエルト、

ワード

シタイン

建部氏

スモール

グムプロキチ

ギンセンクス

ツハレンバ

ハミルトン

各社會的科學の史

ロベルチー等の數人と、人類學者及び國家學者の社會に關する研究に及んだのみである。其の他ギンクス (Giddings) ギンセント (Gorge Vincent) 等の學者が種々の雜誌上で社會學の發達、問題等を論ずる者は少なくないけれども、學史の體を備へて居るとは云はれぬ。外に一部の書として、ベーレンバハ (Bärenbach: Die Soziale Wissenschaften) 及びハミルトン (Hamilton: Present Status of Sociology) 等の著述があるけれども、此等の書物は皆そのものを統一的として研究する社會學の歴史と云ふよりも、むしろ各種の社會現象を、部分的に異つた立脚地から研究する諸種の學問、即ち社會的諸科學の現狀又は由來を叙するものであつて、純粹社會學に關しては、特に精細なるものはないのである。勿論此外にも各科の社會的科學としては、國家學、經濟學等を始めとして、歴史的敘述の備はれるものが少くはないけれども、其總括は社會學史を爲すことは出來ない。蓋し純正社會學はよしその

現代の學者

社會學書
中心問題史

コムト以前

コムト以後

趨勢の觀察

進歩に於て見るべしとするも、其多くは現代の學者であつて、未だ全體系を示さざるものがある。又其學說の變遷は豫期すべきでないから、若し各學者の意見を忠實に叙せんとすれば、勢ひ社會學書史に終らなければならぬ。そうでなかつたならば、中心問題を捉へて其の大勢を叙するの外は途がないからである。かゝる次第であるから今こゝに社會學を叙するに當つて、コムト以前に對しては、思想史の時代的區別によつて、古代中世及び近世の、哲學的思想並びに社會的科學の發達の中に、社會學的研究が如何に變遷發達したかを概括するに止めて、コムト以後に就ては社會學が建設を試みられて、やゝ形を爲すに至つたこと即ち社會學の成形の因縁と、コムトの學說に於ける社會學を叙し、其以後に起つて來た社會的研究の中心問題に關しては、諸家の主要なる學說の概観を考察して、現下斯學研究の趨勢を觀察するに止めやうと思ふ。其順序を誌るして見れば、

叙述上の區分

- (第一) コムト以前の社會的研究。(1) 古代に於ける社會學的研究。
 (2) 中世に於ける社會學的研究。(3) 近世に於ける社會學的研究。
 (第二) コムト以後の社會學。(1) 社會學形成の因縁。(2) オーギヌスト、コムト。(3) 社會學の學派。(4) 社會の生物的考案。(5) 社會の心理的考察、社會學研究の現状。と云ふ様に區別をして説かうと思ふ。

本稿中、現存の學者や、故人でも別に深い關係のないものはその生年月には及ばぬ。著書は學者名と同時に列記して、もし明かであればその初版の年を附記する。但し其不明なるものは省略した。又た前述の通りコムト以前の社會學的考察とコムト以後社會學が一科の學として認められた後の研究との間に輕重を區別して、成立以前のものは、極めて簡略にし、その以後の分をば比較的詳細に述べたのは、本書の目的上當然の所置だと信ずるからである。

第一章 古代に於ける社會學的研究

社會學的究竟の源流を尋ねるものは、概ねプラトーンより始むるを常とするのである。ひとり、ルシタインは遙に希臘思潮の初頭にまで遡り、エレア派の哲學者の思想の斷片の中にも之を探らうとした。又た我が建部氏は更に印度、支那等に於ける東洋思想にまで及んでその源流を求めて居る。併しながら東洋の事は姑らく措き、歐洲に在てはプラトーン以前の社會學的研究は、自然哲學より論及せる人生觀の斷片でなければ、詩歌に現はれた民族思想、政治的施設、若しくは史學の記述中に、僅かに之れを物色し得るに過ぎない。ソクラテース (B.C. 470-399) の人生哲學は社會的事象の研究に涉つて居るには相異がないけれども、具體的に一の社會現象に關する學理的の秩序ある意見を、其中に認むることは出來ない。その之あるは

社會研究の源流

エレア派の哲學

東洋思想

人生觀の斷片

ソクラテース

プラトーンの說
「共和國」
「法律論」
國家の目的

靈魂の三部

四大徳

プラトーンに始まるのである。

プラトーン (Platon B.C. 427-347) の哲學的思想の中で、社會に關する研究は、その名著「共和國」(Republic)、及び「法律論」(Gesetz) などの書物のなかに現はれて居る。プラトーンの說によれば、國家の目的は道徳的である。すなはち、その成員をして道徳的生活を全うせしめることはその職分である。されば國家は神學や文學や及び體力の養成などを奨勵して、各人に智、勇、節制及び正義の諸徳を涵養せしめるのである。智は理性であり、勇は氣力に該當し、物欲には節制が必要である。理性、氣力及び物欲は靈魂の三部である。すなはち此三つの徳は一々靈魂の三部に相應して居るのである。而して靈魂の各部が、理性の指示し命令する所に従つて、圓滿に秩序を保たんが爲には、正義の徳がなければならぬ。

プラトーンは智と勇と節制と正義との四つを四大徳と名けて居た

國家は人間
である
國民の三階
級
正義
國家の中樞
國家は大家
族
理想的國家
妻及財產の
共有
教育
労働

が、所謂四大徳は、國家的生活の中に爰に始めて實現するのである。國家は大規模の人間である。(と云ふのは、これ即ち國家と有機體との比喩的斷定と見るべきである。)人間靈魂の三部に相應して、國民にも三階級がある。治者は理性である。文武官は氣力である。農工商の人民は物欲に相當する。その故は國家の物的需要を充すの機關であるからである。智、勇、節制の三者は、それ〴〵此等三階級の徳である。而して國家全體の徳は即ち正義である。されば國家の治者は智者たるを要する。換言すれば、哲學者にして始めて國家の中樞たるを得べき者である。國家は一大共同家族であるから、國家的生活は協同的生活であり、共産的でなければならぬ。と云ふのがプラトンの理想的國家であつた。されば彼は妻及び財産の共有を主張し、又兒童は兩親の手に保育しないで、國家によりて、平等に教育せらるべきものであると説いた。彼は又労働を賤しんで、之をば

主權者は哲
學
貴族主義の
國家
共産主義
社會有機體
說
理想統治國

全く外國人及び奴隸の手に一任してしまつて、他の經濟上の事業は一切國家によつて經營せらるべきことを主張したのである。プラトンの社會觀は、國家の主腦は治者たる哲學者であるとして、他の人民はその指導を俟つて協力すべきに止まり、個人としての價値がないと見たること、及び労働を賤しみたる點より見れば、貴族主義であつて、其理想的國家は貴族的國家である。又私有財産に反對して凡ての財産を國家の公有、國民の共有たらしめんとした點から見ると、共産主義である。國民の教育に關しては國家主義である。而して、たとひ比喩的にもせよ、國家は大規模の人間であると思ふ點では、社會有機體の觀念の翹楚であつたと云ふてよい。プラトンは又嘗て伊太利の一地方に於て、その理想的國家の建設を企てたが、竟は失敗に終つた。その經驗によりて、彼はその理性統治國は、異常なる哲人の手を借るのでなければ、到底これを實現し得な

第二位の國家
法治國

いことを知て、「法律論」に於ては、理想國に達する準備として、第二位の國家即ち法治的國家の必要を認めて、やゝ實行し得べき共產的國家を説くに至つたのである。

アリストテレスの説
現世的國家論
「政治學」

アリストテレス (Aristoteles B. C. 385—322) はプラトーンの理想的超絶的國家論とは異つて、現世的な國家論を唱導した。アリストテレスの社會觀はその倫理説及び「政治學」(Politics) なる著書の中に現はれて居る。その説に依れば、人は元來社會的のものである、政治的動物である。社會の原形即ち最初の形は家族であつて、その最高の形式は國家である。人類は國家的生活の中に於て、始めてその完全なる活動を開始することが出来る。國家は最高善の實現であつて、國家的生活は人性の圓滿なる發達を終局の目的とするのである。進歩發達の要諦は徳の修養であつて、徳の要は中庸を得るのにある。個人的利害を無視するのは、國家を強固ならしむる所以ではない。

人は社會的動物
國家的生活
最高善の實現
進歩の要訣
中庸

權力と服従

國體三分説
正體と變體

れども、個人はたゞ國家的生活によりてのみ、その圓滿なる發達を爲し得るのであるが故に、此目的の爲には個人は國家の權力に服しなければならぬ。故に國情に由り、國家は或は個人を強制し、或は個人と共治する。そこで國體には三種の別が生ずる。即ち君主國、貴族國及び民主國である。此三種を國體の正體とする。正體の外に變體の國體なるものがあつて、亦三つある。暴君國、寡人國及び衆愚國がこれである。此の國體三分説は國の統治者即ち主權を有つて居る人の數から立てた分類であつて、主權が一人の手にある國體を君主國と名づけ、國民中の少數者たる貴族の手にあるときは貴族國と稱し、之に反して主權が一般人民の手にありと見做さるゝ國を民主國と呼んだのである。この説は長く學者によりて繼承されたが、實際の上では、主權を振つて居る人々の數と云ふ點からでは、貴族國と民主國とは甚だ區別し難いのである。併しながら、アリストテ

君主國
貴族國
共和國

希臘諸國の
状態

暴君國

寡人國

衆愚國

レーリスは、當時の希臘諸國の状態に適する様な説を立てたので此點では適切であつたと云はれて居る。君主國で、君主の專制がその極端に至つて、國民を度外視して暴力を逞しくする様なものは、暴君國である。富豪が其利益の爲めに國權を濫用する様な國は寡人國である。下級貧民がその多數を恃んで國政を左右する様なのは衆愚國である。これが謂ゆる國體の三變體である。そして一種の國體が凡ての時、處、位に通せざるは、なほ一枚の衣が各人各時節に適せないと同様であるとアリストテレースは説いて居る。

運動の原理

進化論

アリストテレースは又その^{テレオロギヤシエニエルトアンシヒト}究意見的世界觀より、社會の進化及自然界の進化を説いた。その説に依るに、運動と云ふ原理は弘く萬物に通じて行はれ、萬物をして不完全から完全に推し移らしめる。されば、萬物は皆完全ならむとする内部の力即ち内在力を有するのである。アリストテレースの用ひた運動と云ふ語は極めて廣い意味で

自然界の進
化

植物的動物

感覺と欲

人間は最高

思索力

社會觀

あつて、所謂運動に三つの種類がある。物體の位置の變動、性質の變化及び分量の増減はすなはち是である。自然は不完全から完全に向つて變化し運動して、以て絶えず進歩する。最下の状態は無機物であつて、後に變化し進歩して有機物となる。云ひ換へれば、物質より生命に進むのである。生物の中でも、植物は動物に比すれば生命の度が低い。感覺と情緒とがないからである。動植物の中間に、植物的動物がある。海綿の如きは是である。次に感覺のある動物がある。感覺が生ずると、食欲及び他の生活欲が次第に増進して來て、此と共に體の組織が漸次に複雑の度を加へて來る。人間は此進歩の頂點に位するものである。人は他の生物に見られない無形のことを考へる力即ち抽象的思索力を有し、體格や頭腦に於ても高尚な情緒に於ても、一切の他の生物に優つて居る。人間は更に社會的生活に於て、家族的から起つて進んで國家的となり、以て能く最高善を實

現することが出来る様になるのである。

アリストテレスの社會觀は、その國家論と進化的思想と、及び人間の社會的性質の中に道德の根源を究めた點とに於て、後の社會的研究の上に貢獻することが最も大なるものがある。

アリストテレス以後の希臘哲學に在つては、社會學的研究に貢獻したものは、ストア派及びエピクロス派の哲學であつた。ストア派の學説は、宇宙には之を支配する規律があるとして、之を自然律と呼んで居る。その人性に現はれたものは理性である。されば賢者即ち有徳者の道は、自然に従ふて生活するにある。意志を一般の自然律に一致せしむることが。即ち徳であると教へる。恰かも儒教で、天の命之を性と云ひ、性に從がふこれを道と云ふと説くのと同様である。かくして彼等は人間の義務及び道德律の存在を説き又自然法論の祖となつた。此思想は、一面には、人間界即ち社會を

ストア派

自然律

理性

義務と道徳

社會的理法の暗示

權利の平等

世界主義

エピクロス

快樂説

民約論の先驅

功利説の淵源

支配する法則が、やがて自然を支配する大法と一致することを暗示し、他方には、社會現象にも亦一定の理法の貫通するを認めたと云つてよろしい。ストア派は又人間の權利の平等を説いて居る。これ人は皆一樣に理性を具へて居るから、平等の權を有すべきものと見たのである。すなはち世界主義の思想の嚆矢である。彼等は又世界は絶へず出來たり滅したりして、成壞循環止むことなきものであると教へた。

エピクロス (Epikuros, B. C. 341—270) はその倫理上の社會觀に於て快樂主義であつた。此根本思想は之を演繹して考へると、社會の目的は人民の快樂即ち幸福を求むるにあると云うことになる。エピクロスは又功利主義の立場にある民約論を説いた。此の點に於て彼は後の學者ホッブスやロックやルソーの民約論の先驅であつて、又た同時にミルやベンザムなどの功利説の淵源となつたのである。

第二章 中世に於ける社會學的研究

中世哲學
教父哲學
訓釋哲學

神國論

グノーシス
派の歴史觀

宇宙の過程

善惡の闘争

中世の哲學は殆んど宗教哲學を以て終始して居る。教父哲學に於ては特に然うである。訓釋哲學即ちスコラ哲學 (Scholastische Schiele) の研究に於ては、アリストテレースの哲學を本として、基督教々義の根柢に哲學の理論を供せんとしたもので、その旨趣が宗教に在るが故に、又遂に宗教哲學の範圍を出ない。もしそれ社會的考察を此宗教哲學の中に究め得べしとしたら、それは基督教的の神國論を主とす可きのみである。

グノーシス (Gnosis) 派は宗教的立脚地から歴史と宇宙とを觀察しておもへらく、基督教が他の宗教を征服するのは、これ宇宙の歴史の過程が人類の歴史に現はれたものと云ふべきである。宇宙的過程は善惡の闘争であつて、此争は基督の救済によりて、善の勝利を以て

歴史哲學の
淵源

アウグスチ
ヌスの説

罪の子

基督の救済

終るのであると、此派の學者は説いて居る。これ宇宙的理法が人間界をも支配すとなすものであつて、ストア學派の倫理説が、理性をもて自然律の現示であると見たのと同じく、自然界を支配する理法は同時に人間即ち社會を支配することを認めたのである。此説は一方に於ては歴史哲學の淵源を爲し、他方に於てはストア派と共に社會現象を支配する一定の理法の存在するを暗示して、間接ながら社會學の建設に貢獻する所があつたのである。

教父派の碩學アウグスチヌス (Aurelius Augustinus, 354—130) は、人類の罪惡はその自由意志に基づくものであつて、人間の祖先がその自由なる意志によりて罪惡を犯したから、その子孫も亦罪惡に傾く性を承けたのであると説く。されど神は慈悲である。正義である。故に人間を救はんが爲めに贖罪を要求するのである。基督はあはれなる人の子の爲に救済の任に當つた。すなはち基督を通じていなければ

神の御國

國家的生活
の貶騰
アケイヌス
の説

國家は神の
制定
國家の目的

教會と國家

井リアムオカム
の説

ば救濟の道がないのである。教會は基督の救濟の事業を繼承して、その代表者となつて居るものである。教會は地上の神の御國であつて、そしてその主權者は法王であるから、教會以外に救濟の道なしとは彼の見解であつた。是れむしろ人類の國家的生活の貶騰であつた。之れに反してスコラ派のトーマス・アクイヌス (Thomas Aquinas, 1227—1274) はアリストテレスの説を奉じて、人の社會的性情を認め、世上の國家は神の制定した所であつて、人類が犯罪と墮落との結果ではない。其目的は人をして世間的道德を修めしむるにある。されどこれのみでは足らぬ。更に進んで神の救濟に浴することが必要である。即ち教會はその任に當るものである。故に教會は國家の上立つて之れを監督して、その目的を得せしむべきものであるとして居る。井リアムオカム (William Ockham) は又別に説をなして曰く、聖權法王權及僧權は王權とは異つて居る別のものであるから、

聖權と王權
との別
國家の起原

中世哲學と
社會學

法王や僧侶の權力を以て世間的の政權に干渉するは非であると。彼又國家の起原を論じて曰ふ、國家は個人が相互の利益の爲めに、隨意に結べる團體であると。これエピクロスと共に民約論の源流を爲した思想である。かくして一たび宗教哲學によりて否定せられた國權は、再びその存在を恢復したのであつた。

哲學史で言ふ所の中世哲學に於ては、社會的考察は甚だ貧弱であつて、今述べた數人の説位なものである。しかもそれすら、アリストテレスの哲學や、他の希臘思潮の焼き直しに過ぎない觀がある。たゞ國家と教會との關係、法王權と王權との事實問題や、その議論の中に、後の國家學の研究を呼び起した點で社會學に多少の關係があるに過ぎぬ。然るに通常歴史家が近世史と名づける時代は、宗教改革を以て始まるが、中世哲學と宗教改革時代の思想との間に、その過渡期と見るべき文藝復興期が介在して居る。

文藝復興運動

中世思想界の暗黒史の幕落ちて、近世文明の舞臺が將さに始まりとすに先ちて、謂ゆる文藝復興の運動が起つて、社會的研究も亦たその端緒をこゝに開いた。既に述べたる如くトーマス及びボリ

ダンテの反抗

アム・オ・カム等によりて、王權は聖權から分離せられたが、復興期に入つてから先づ伊太利の大詩人ダンテ (Dante Alighieri, 1265—1321) の著書「政府論」(De Monarchia) 及び「新生命論」(La Vita Nuova) などによつて、教

マキアエリ

國民の獨立

權に對する反抗及び個人性の自由回復の絶叫となつた。降つて十五世紀に至りマキアエリ (Niccolus Machiavelli, 1469—1527) は「君主論」(Il Principe) なる書物を著はして、更に進んで政治の理想は國民の獨立及びその勢力の増進にあることを説いた。マキアエリの説によれば、國民の獨立とその勢力の増進とは、體力と智力との絶群なる人格の指導に一任して、民衆は唯これに従ふにある。大立法家は何物をも自由に作り得べきものである。人性は惡であるが、大立法家の作つた善な

大立法家

專制の擁護者
將た共和主義

最高の道義

教會と國家

アラビアの學問

る法は能くこの人性をも善ならしむるを得るとマキアエリは説く。此點に於て彼は君主專制の擁護者の様である。然れども國家的統一の手段として之を認め許りて、その實は共和主義者であつた。すなはち彼は一方に於ては、國民は君よりも貴しと説いたのである。故に國民的一致協力と併進する範圍に於ては、人民各自の自由を増進せしむることは最高の道義である。然るに教會は之を妨碍する。國家は宜しく之と闘はざるべからずとはその説であつた。かくして彼は謂ゆるマキアエリ主義を主張したのである。斯の如く學說の上ではむしろ貧弱であつたけれども、中世に於ける社會的事情は、やがて近世文明の活躍を促すべき素因を具へて居た。すなはち、法王權と王權との衝突に由て、國家論的研究の序幕が開かれた上に、中世思想界の暗黒界に於て、唯一知識の泉源であつたアラビア人の學問の影響を受けて、自由研究の學風が輸入せられ、各地に大學も建

十字軍の結
果
アフリカ週
航
アメリカ發
見
人類の比較
研究

設せられ、此氣運の中にダンテの外ペトラルカ (Petrarca) やボッカチオ (Boccaccio) の如き人々を生じて、文藝復興運動の先驅者たらしめた。又十字軍の結果として小亞細亞邊の土地や人情やの研究も出來、此外に蒙古人の侵入と共に東洋の風俗や多少文物の輸入もあり、又アフリカの週航やアメリカの發見に由て、異人種や蠻族の社會の狀態が紹介せられ、此等が動機となつて人類學や人種學やの様な人類の比較研究を促がすに至り、遂に近世の文明を生み出し、社會學建設の機運を喚起する原因を作つたのであつた。

第三章 近世に於ける社會學的研究

近世の社會學的研究は、文藝復興期を受けて又國家論を以て始まつた。すなはちボイダン (Jean Bodin, 1530—96) は其著書 (Six Livres de la Republique) に於てマキアゼリ主義に反對して君主政治を主張した。(後に獨逸のフリードリヒ大王 Friedrich der Grosse, 1620—88 亦書を現はしてマキアゼリを攻撃した。) ボイダンは更らに宗教の自由信仰を説き、又た自然法説を唱へた。此外にもマキアゼリズムに就ては是非の議論が頗る多かつたのである。

グロウチウス (Hugo Grotius, 1583—1645) は有名な「和戰の法律」(De jure belli et pacis) と云ふ書物を著はして、

自然の觀念を明にして、國際法の基礎を立て、國際法學の父の名を得た。自然法は性法又理想法とも唱へられて、吾人が理性に依て

ボイダンの
説

グロウチウ
ス

國際法の父
自然法説

その代表者

ホッブス
ロックス

民約論

知り得べき法律的原理が、自然に存在するとする説である。此觀念は夙にストア派の説にも見え、又ボイダンも之を認めたが、グロッチウスに至りて明にせられたので、是より後此説を唱ふる者が多く出て來て、ホッブス、ヘーデル、ルーツソーの如き人々も此説を取つた。

又英國の哲學者ホッブス (Thomas Hobbes, 1588—1679) 及びロックス (John Locke, 1632—1704) は國家の起原を論じて人民の契約にありとし、これを本として法及び國權論に及び、佛のルーツソー此の思想を受て謂ゆる民約論を大成した。民約論も前に述べた通り、エピクロスの説に起原し、キリアム・オッカム等の宗教觀中にも現はれ、近世に於てはアルツィシウス (Johannes Althusius) やグロッチウスの國權論中にも此の思想を認めることが出来るが、ホッブス以下の人々に至りて此の觀念は明かにされたのである。ルーツソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712—1778) の有名な著書「民約論」(The contract social, 1762) はその代表とも見るべきである。

ルーツソー

自然状態

萬人は萬人の敵

社會契約

國權の由來

自由主義

民約論の論據は人類の自然状態にある。民約論者の説によれば人間は^{社會}由來利己的である。各人は自分の欲求に急であつて他を顧みない。甚だしきは他人を排斥して、之を犠牲としてまでも自己の欲を遂げやうとすること禽獸と異ならない。ホッブスの語を借りて云はば萬人は萬人に對して敵たる状態に在る。即ち人類が法律や道德の拘束を受けない自然の状态は戦闘状態であつた。然るに此の如き劇しき生存競争は人間の堪へ得ない所である。そこで各人はその生命や財産の安固を得る爲めに、互に契約をして、各自互に其自由を制限して一般の安全を謀ることとなり、此契約に依りて國家は成立し、各人は其天賦の權を國家に委任して、此れが爲に國家は民衆支配の權能を有するに至つた、と云ふのは民約論の根本思想であつて、此の思想に本づきルーツソー等は人民の自由を説き民主政治を主張した。ルーツソーと前後して佛に「ローマ興亡論」(Considération sur les causes de la Grandeur

モンテスキュー

et Décadence des Romains) 及び「法律精神論」(L'esprit des Loix) の著者モンテスキュー (Montesquieu, 1689—1755) が出で、又た「人性進歩の歴史」(Esquisse d'un

コンドルセ

tableau historique de progrès de l'esprit humain) の著者コンドルセ (Condorcet, 1743—1794) 等が相繼いで出で、法及び國家に關して心理的説明を試みた。此等の學說に基づきて、自然法、社會契約、民主政治及び人民

國家學の研究

の自由等の問題に關して、學者の間に論争考究が盛に起り、天賦人權論は佛國大革命の精神的基礎を爲した。こゝに至て國家學の科學的研究は始まつたのである。

法理的研究

歴史派法學者の科學的研究

此の國家學的研究と共に法理的研究亦伴うて起り、ホッブス、ロック等に胚胎して、グローチウス等によりて自然法の研究が試みられ、更にモンテスキューに至りてその研究が漸く進んで來たが、法理の科學的研究の新局面を打開させたのは謂ゆる歴史派法學者であつた。此學派は、從來の研究者が動もすれば獨斷的推理的に法の性質を研

サヴィニー

プロヒタ
國民權利確信

導法の感情

社會主義の
思潮的共産主義

究したのに反して、少くとも成文法は歴史的事實に本づき、その淵源を追ひ究めてその性質を明かにせなければならぬものだと唱へて、自然科学の研究法即ち實驗的歸納的方法を法理の研究に應用したものである。その首唱者は獨逸のサヴィニー (Savigny, 1814—1875) であつて、プロヒタ (Fuchta, 1798—1846) 等の學者と共に國民の權利確信 (Volkrechtstheilurzeugnis) なるものが法の主觀的基礎なることを説いた。英のメイン (Sir Henry Maine, 1822—1888) も亦同様の考を持つて、同様の研究法を追ひ、導法の感情 (Law-abiding Sentiment) と名づくべきものが主觀的に見た法の基礎たることを唱導したのである。これより後歴史派たると然らざるには論なく、法の科學的研究は益々盛なるに至つた。

國家學及び法律の研究と相並んで、近世の社會學的考案に著しきものは、社會主義の思潮である。共産主義の思想が夙にプラトリーに於て見らるゝ事は既に述べた。近世に於てはトーマスモリア (Thomas

モリアの
トピア

「太陽の都」

「平等社會」

「イカリヤ旅
行記」

空想的理想
國

More, 1480—1535)が、當時の英國社會制度の弊を諷刺し、空想的に理想國の建設を小説中に試みた。即ち有名なるユートピア(Utopia)が是れである。之に次ぎてトーマスカムパネルラ(Thomas Campanella, 1539—1639)の「太陽の都」(Civitas Solis, 1637)と云ふ書物が現はれ、モレリーの「バジリアード」(Basiliarde, 1753)と云ふ詩篇が出で、バブーフ(Babouff, 1764—1797)の「平等社會」(Société des Égaux)と云ふ著書となり、カベール(Etienne Cabet, 1788—1856)の「イカリヤ旅行記」(Voyage en Icarie)と云ふ著書となつて、共產主義の思想は次第に起つて來た。是等の人々の共產主義は、現社會組織の不完全な爲めに生じ來る弊害を除かうとする社會改革の案ではあるが、その立論の根柢が確乎たる學理的基礎のあるでもなく、又その改革案も、突飛なものが多くて、唯この不完全な社會を打破すると云ふことが主であつた。勿論彼等にもその建設にかゝる理想の新社會はあつたけれども、その理想たるや空想的分子が多く、

私有財産と
特權の廢止

犯罪の起原

オーエン

サン、シモン

フーリエ

フラン

ブルードン

人間の性情の自然と云ふことをも顧みず、たゞ一切の財産を共有として、平等に各人の要求のまゝに、社會がこれに與へねばならぬと説くので、要するに一切罪惡の起原は私有財産制度及び特權にありとして、急に舊社會組織を破壊し、此等の罪惡の原因を一掃すれば、各人は博愛念に基づいて社會の爲に勤勉労働するものと獨斷的に定めて立てた案である。

然るに此の共産的社會改良案は英のロバートオーエン(Robert Owen, 1771—1858)の出るに及びて新に社會主義の名稱を得ると共に、次第に空想を離れて實行的となり、佛國に於て盛に唱へられ、サンシモン(Saint Simon, 1760—1825)を経てフーリエ(François Fourier, 1772—1837)の「フアラシ」(Phalange)の社會組織、ルイブラン(Louis Blanc, 1813—1882)の「社會工場」の提唱となり、ブルードン(Pierre Joseph Proudon, 1809—1865)に至りて、共產主義とは大に趣を異にする様になり、更に獨逸のマ

マルクス

「資本論」

ラッサール

經濟學

アダム・スミス

國富論

リカルドー

ルクス (Karl Marx, 1818—1883) の出るに及んで、近世の産業に於ける資本制度の研究の上に、科學的基礎を求めて社會主義を建設するに至つた。マルクスの大著「資本論」(Das Kapital) は有名な研究である。マルクスと時を同じうして獨逸にラッサール (Ferdinand Lassalle, 1825—1864) が出で、マルクスの學說によつて之を實地の政治運動とするに及んで社會民主黨の大勢力となるに至つたのである。

此の社會主義と密接に相關聯せるは經濟學の研究であつた。經濟の起原を佛國の重農學派に見むべきか、若しくはアダム・スミス (Adam Smith, 1723—1790) の有名なる著書「國富論」(Wealth of Nations) に置くべきかは姑らく措いて、元來廣義の國家論の一部に過ぎなかつた經濟學は、十八世紀に至りて一科の學として認めらるゝ様になり、「經濟學及び租税の原理」(Principles of Political Economy and Taxation) の著者たるリカルドー (Ricardo, 1772—1823) や「人口論」(An Essay on the Principles of Population)

マルサス

ミル

マンチエスタ
ター派

歴史派
社會經濟學

同情は社會
結合の基礎

社會的本能

の著者マルサス (Malthus, 1766—1834) や、及び有名なる經濟學者ジモン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806—1873) 等の次で出づるに及び、謂ゆる正統派又はマンチエスタ派なるものを爲し、自由放任主義に基づける經濟學を成した。而して經濟現象は社會現象の最も重要な部分であるから、その研究が社會學に貢献したのは明である。後に歴史派の經濟學が起り、最近に於ては更らに社會經濟學となり、碩學が各國に輩出するに至つた。特にスミスが經濟現象のみではなく、他の社會現象にも亘て論究し、其著「道德的情操論」(Theory of Moral Sentiments) に於て、同情を以て社會結合の基礎となし、後の社會學、特に社會の心理的基礎の問題に對して少からぬ暗示を與へたこと、又はマルサスの人口論、歴史派の經濟現象の研究法、及び社會經濟學派の社會的本能を重んじ、富の理論を欲望の如き心的要素の社會的關係に求めたなどは、社會學上最も重要な意義を有するのである。

史學及び人類學

次に近世に於ける社會的研究として重なるものは廣義の史學及び廣義の人類學の發達である。史學は各個社會の事件の記述にして、人類學は自然的存在の一としての人類の記述であるけれども、その研究の盛なるにつれ、史學には文明史及び歴史哲學を生じ、人類學も亦その立脚地からして人類社會の研究を爲すに至つた。

文明史

一般史學は近世に至り非常の進歩を爲したが、有名なる「文明史」

ギゾー

(Histoire de la civilisation)の著者ギゾー(Guizot, 1787—1874)及び「英國文明史」

バックル

(History of Civilization in England)の著者バックル(Buckle, 1821—1862)等出で

、文明史なるものを生じ、人文の歴史的事實上に於ける發展を説く傍ら、その史實の間に因果的脈絡を求めようとするに至り、謂ゆる文明史なる一派の學者を生じた。然るに他方に於ては之れに相似たる他の一學科を生じた。すなはちシュレーゲル(Schlegel, 1767—1845)及びヘーゲルの歴史哲學を説くに及びて新たに二分科を生じたのである。

歴史哲學
シュレーゲル

ヘーゲル

人類學

人文の史的敘述を文明史の本領とし、歴史的事實の間に一貫の因果的脈絡を發見せんとするものを専ら歴史哲學と稱するに至つたのである。此の二者に至つては最も社會學に近く、爲に往々社會學と同視せらるることがある。廣義の人類學は源流をヘロドトス(Herodotos, B.C. 500—424) アリストテレース及びヒツポクラテース(Hippokrates, B.C. 463—377)等の希臘の學者に發し、アレキサンドリア(Alexandria)の諸學者によりて其研究が次第に進んで來たが、中世に於ては基督教の創世記に於ける人類起原説と人類學的研究との衝突から、宗教家は此種の研究を迫害し、爲めに一時中絶した。然るに近世に至りて學術の自由研究の氣運が勃興すると共に、新大陸の發見、世界週航及び各國の殖民政策等の事實により、人類に關する知識も益々増進し、人種の研究、蠻人社會の研究、並に古代社會の研究が盛に行はるゝ様になり、此の方面より社會の研究を試みるもの相繼いで出で、

人類社會の研究

人類學的社會學の形響

又他の科學をして比較的研究の資料を得しめて、社會學的知識に貢獻する所甚だ大である。否、加之、後には人類學的社會學の流行と共に、社會學と同一視せられるまでに至つた。此の他哲學の方面に於ても、カント派の諸大家の思想、特にヘーゲルの客觀精神論、歴史哲學及びフイヒテの國家に關する思想などは、社會的研究の上に著しき影響を與へたのである。

第四章 社會學成立の因縁

社會的科學の探求

國家學
法理學
經濟學

哲學

人類學

上來叙述せしが如く、社會學的研究は其の部分的知識に於ては古代に起り、中世を経て近世に至り學術の大に勃興するに迫んで、その量に於てもその質に於ても愈々大と精とを加へ、謂ゆる社會的科學若くは社會に關する理論は漸く大成の日に近づいた。然るに這般社會的科學の進歩は、更に進んで社會そのものに本質を明かにし、その間に何等かの理法を見出さんとする必要を感じるに至つた。即ち國家學は國家統一の原理を探求し、法理學は法的現象の起原を權利確信の如き主觀的要素に求め、經濟學も亦欲望の社會的關係と、人の社會的性質にその根本原理を物色し、歴史哲學は人類の歴史的事實に因果的關係を發見しようとして試み、人類學社會の比較研究によりて概括の理論を構成せんとす至り、ひとり科學のみならず社會主

社會的生活の本義

根本の要求

統一原理の必要

社會研究の資料

比較的研究と歴史的研究

義も亦主として産業的經濟的方面から社會組織の改革を要求してその理論を社會的生活の本義より演繹せんとする。這般の要求の歸適する所は社會そのものに本質の闡明、及びそれを支配すべき理法の發見にある。此要求、此の機運は既に起つたけれども、此等諸般の社會的科學は各その研究の方面を異にするが故に、互にその立脚地を異にし、同じく社會の本質を探求するけれども、その觀察おのづから差別があつて統一する所なく、従つて社會の統一的解釋に到達することは出来なかつた。

這般社會的諸科學が哲學的基礎即ち統一的原理を要求するに至りしこと、並に人類學及史學の研究が諸種の社會的現象の豊富な資料を供給し、比較研究及び歴史的研究の氣運を促したことは實に社會の統一的研究たる社會學形成の内在的原因であつたのである。機運は既に動いて、要求は既に存する。しかも社會の根本的性質に

理法發見の必要

自然科學の進歩
進化論の暗示
社會改革の急務

科學の影響
自然界の理法と社會

關する科學的研究を成立せしめるには、社會現象を支配すべき一定の理法を必要とするのである。然るに近世の學術勃興の結果は、此の問題に對して一道の説明を與へた。自然科學の進歩が齎らせし暗示はその一である。進化論の研究はその二である。更に外にあつては社會主義の運動盛に起つて、急劇な社會的革命を絶叫した爲め、社會の根本的性質とその原理とを究明して、社會問題の科學的基礎を定むるの急務なるを感せしめたのである。この自然科學の暗示と、進化論と、社會主義の運動とは、社會學形成の近因であり、機縁であるのである。

近世に於ける自然科學の異常なる進歩は今さら叙説するまでもなく、自然科學の赫々たる偉勳は萬般の知識に對して種々の影響を與へたのである。その中社會學の成形に對して寄與した點は、自然界を支配した法則も、同時に少くとも生物的存在として人的現象を支

精神科學の
革命
物的理法と
心的理法と

統計的研究

社會的科學
の心理的
的説

社會學建設
の內面的
理由

配すてふことを教へたのにある。これ特に生物學の研究から來た所で
あつた。先づ從來の內省的哲學を實驗的たらしめ、精神物理學又は
實驗心理學の研究を催起して其基礎たらしむるに至り、一切の精神
科學を根柢から改革し、之と共に物的理法が又以て心的現象を支配
するものであることを知らしめた。同一の精神は次に社會現象の統
計的研究を喚起し、大量觀察によるも社會現象にも又一定の規律の
存するを發見せしめた。更に社會的諸科學がその主觀的説明を心理
的現象に探求するに及びて、社會的現象を支配する理法も又物的現
象を支配する理法と一貫するものでないかと想見せしむるに至つた。
これ自然科學が社會學建設の機運に與へた有力なる暗示であつた。
社會學は社會の生物的考察から初まつて、次第に心理的考察に及
び、最近に至つて綜合的考察に進んだが、その此の如くなり來つた
最初の內面的理由は、實に此自然科學の暗示に伏在して居ると云ふ

てもよ。

生物進化と
社會進化
進化の思想

純正哲學的
見解

生物進化及び社會進化の思想が夙くもアリストテレスの深遠なる
思想に存じたことは既に指示した如くである。尤も此進化の觀念は
尙ほ之れをイオニア學派のアナキシマンドロス以下の自然哲學者、
及びヘラクライトス等に溯り得べきことはハッケル (Haeckel) 等の説く
所の如くであらう。然れども此等は單に純正哲學的見地から獨斷的
に演釋し來れる所であつて、科學的確實を缺いて居る。ひとりアリ
ストテレスの説は事實に基づく所少なくなかつた。中世に於ては
アウグスチヌスに於いて多少進化論的思想を發見することが出来る
けれども、到底云ふに足らぬ。十世紀に至り自然科學の進歩につれ
て、進化論は確實な科學的基礎の上に著しく進歩した。近世の進化
論はベーコン (Bacon) デカルト (Descartes) ライブニッツ (Leibnitz) ヒュ
ーム (Hume) シーリング (Seielling) 等の哲學の大家、及びヘルデル (Herder)

自然科學的
進化論
星雲假定説

レッシング (Lessing) 等の思想に存じたが、科學的に唱導せられたのは
カント、ラプラスの星雲假定説 (Kant-Laplace's Nebula-Hypothesis) を始
めとする。之れから以後、天體、地質及び物質等に關して、進化の
學說相繼いで出で、更に生物進化論となつた。

ビュッフォ
ン
ゲーテ
テマルク
ダ
ワ
レイ
ス

生物進化論は佛のビュッフォン (Buffon) が種の變化を説きて、外圍
の事情に基づくとせるを始めとして、ゲーテ (Goethe) の植物變體論
ラマルク (Lamarck) の生物の諸器官の用不用による進化説等を経て、
ダーキン (Darwin) 及びワレリス (Wallace) の研究に至り、こゝに始め
て生物進化論は動かすべからざる眞理として承認せらるゝに至つた
のである。

宇宙の進化
社會進化論
カント

物質進化論及び生物進化論は既に認められた。更に進んで此宇宙
進化の理法を社會に適用しようとするは自然の趨勢である。社會進
化論も夙にアリストテレスの思想に存じたが、カントも又物理的

ヘーゲルの
歴史哲學

法則なる反撥力と索引力とを適用して社會進化の心理的説明を試み、
ヘーゲルは歴史哲學に於て社會の進化を認め、之をその哲學原理た
る理性の發現する過程に歸した。

社會と宇宙
的理法

此進化論の研究はやがて又社會を支配する理法が宇宙的理法と一
致する所あるを示すものであつて、社會學の形成に與へたる効果は
實に大であつた。然り、社會進化論はコムトを経てスペンサーに至
りて大成したのである。

コムトの
生とその時
代
社會改革
の運動

終りに佛國の大革命に前後して、社會主義の社會改革運動は愈そ
の高調に達し、此問題の解決の爲には社會の本質を根本的に研究す
る必要は益々迫つたのである。コムトの生れし一七九八年を去る約
二十年前、一八七六年には米國の獨立が宣言せられ、無政府主義の
主唱者バクニン (Bakunin) が死し、一七七八年には自由民權思想の宣
傳者ルーソー逝き、佛國の大革命漸く終つて、那翁一世帝位に登つ

社會學建設
の機縁既に
熟す

たけれど、社會改革の勢なほ盛であつて、其大著「實證哲學體系」の出でた時は、巴里の第二革命起り、ロバート・オーエン、ルイ・ブラン、ブルードン、マルクス及びラッサールの運動正に盛なる時であつた。此事實のみを見るも、社會的革命の氣運が各國を脅かし、社會の根本的研究が如何に必要に迫りしかを想見するに足るのである。因縁既に備はり、氣運既に熟す。熱烈なる宗教家にして社會主義者たるサン・シモンの弟子、實證哲學の首唱者オーギユスト・コムトが佛國に起りて、社會學の建設を企つるに至りしもの、決して偶然ではなかつたのである。

第五章 オーギユスト・コムト

重なる著述

オーギユスト・コムト (Isidor Auguste Marie Jean Francis Xavier Comte, 1798—1857) の哲學は實證哲學である。その學説を述べたるものは即ち

「實證哲學體系」(Cours de philosophie positive, 1830—1842)

である。其他の著書遺稿を合して十餘種ある。就中此書に次いで出た重要なものは

「實證的精神論」(Discours sur l'esprit positif, 1844)

「實證主義總論」(Discours sur l'ensemble du positivisme, 1818)

「實證政學體系」(Systeme de politique positive, 1851—51)

等である。コムトに従へば、實證哲學の眞價と其性質とを了會せんが爲には、吾人は先づ人間知識を一體と見て、其開發進歩を大觀せなければならぬ。之れよく其真相を理解する唯一の道であるからであ

一人間知識の
一體觀

根本的理法

三知識發達の

る。さて人智の開發をその方面と繼起とに從て研究すると、茲に吾人は根本的理法の存するを發見するであらう。此理法たるや實に吾人の歴史的經驗に本づく確乎たる基礎を有するのである。その理法とは、一切の吾人の知識は三つの異なる理論的階段を經過すると云ふことは是である。三段階と何であるか。神學的又は假想的、形而上學的又は抽象的及び實證的又は科學的の三つが即ちこれである。換言すれば人間の心意はその本性上之を哲學化する爲に三つの方法を用ひる。すなはち神學的、形而上學的及び實證的方法である。第一段は人智の發展の發端であつて第三は其歸點である。神學的階段には吾人は事物の本體、即ち起原であつて同時に目的たる原因を探求せんとするのである。其説明は絕對的である。一切の現象は超自然的のもの、直接の動作によりて生ぜられると見做すのである。形而上學的階段にあつては、超自然的のもの、代りに抽象的勢力概念が

神學的時代

形而上學的時代

實證的時代

事物の根底に潜みて、以て現象を生ずる實在であると見做される。此段階に在ては、現象の説明はそれを此概念中に還元するに過ぎない。此二段階は共に世界の絕對的説明を覓むるに於て一つである。神學も形而上學も共に一切事物の起原、終局、過程及び目的を徹底的に解決しやうとする。第三段階即ち實證的階段に在つては、最早宇宙の起原及び運命、若しくは現象の原因の無益なる探求をしない。唯現象の理法を知らんことを求むるのである。換言すれば繼起及び異なる關係を求むるに止まるのである。推理と觀察とはその手段である。されば説明とは特殊なる現象と一般現象との間の關係を明らかにするに過ぎない。此關係は學問の進歩と共に漸次に歸一されて減じて行く。

此に於て實證哲學の性質は明瞭なるべし。實證哲學は實證的認識、即ち事實に基きて其の理法を探求して、斯る實證的知識を一の體系

實證哲學の性質

現象の理法

知識の價值

知るとは衆
め見人が爲
なり

人智開展の
必然的過程

實證的時代
に達する遅

に組織するにあるのみである。吾人は現象の本體を認識しようとはしない。吾人の求むる所は唯現象の理法のみである。事實の常住的關係のみである。人間の知識は畢竟關係の認識である。相對的である。絶對的認識は到底不可能である。吾人は現象の繼起及び俱在と類似及び相異の知識を以て満足する。此の如き確實なる。知識のみが真に有用である。知識の價值はその人生に有用なる點にある。理法の認識は、吾人をして現象の將來の發展を豫知せしめ、之に處するの途を知らしむるが故である。「知るとは豫見せんが爲なり」(Savoir pour prévoir) とはコムトの常用標語であつた。

一切の人間の知識は此三段階を経て發展する。従つて如何なる科學も遅かれ速かれこの三段階を経過するを要するのである。その遅速は現象の普通性、單純性及び他の之と關係ある知識の獨立とに比例するのである。すなはち最も普通に、最も單簡にして他の科學に

自然科學の
二類

抽象的科學

具體的科學

學術系統

無機物理

天體物理

地上物理

關係のない天文學は、最初に實證的となり、次に物理學、次に化學、次に生物學の順序を以て此段階に達した。普通なる程單純に、單純なる程他の知識に依頼しないからである。自然科學に二類ある。一は現象を支配する理法の學であつて抽象的科學と稱せられる。他は此理法を現存する事物の歴史に適用するものであつて、具體的科學又は記述的科學と名ける。狹義の自然科學は是である。實證哲學は單り抽象的科學のみ取扱ふ。理法の研究を目的とするからである。此見地からコムトは有名なる學術系統(Hierarchie)を説いて居る。如上の標準に隨つて、實證哲學に屬する抽象的科學を系統的に彙類したるもの即ち彼の學術系統である。自然的現象は先づ二つに分かれる。即ち無機體及び有機體であつて、無機體を取扱ふ科學は無機物理(Physique inorganique)にして、更に二つに分れる。天體物理(Physique céleste)と地上物理(Physique terrestre)とがこれである。天體物理

天文學
物理學
化學
生物學
社會物理

最終の學最
高の學

數學

は即ち天文學 (Astronomie) である。地上物理は更に二に別れて、地上體の機械的關係を究める狹義の物理學及びその實質的關係を究むる化學となる。有機體を取扱ふ有機物理 (Physique organique) も亦分かれて二となる。個體に關するもの即ち生物學と、群としての種に關するもの即ち社會物理 (Physique sociale) とが即ち是である。社會物理學は即ち社會學である。これは未成の學であるけれども、此學の完成を得て實證哲學は始て其任務を完うするのである。かくして吾人は五ヶの科學を有する。天文學、物理學、化學、生物學及び社會物理即ち是である。然れども猶一の科學を脱して居る。數學之である。數學は一切の科學の基礎である。同時に其要素である。手段である。故に自然哲學の根柢であつて、實證哲學體系の最初に位すべきものである。此の六科學は數學に始まり社會物理に終るので、社會物理は實證哲學の終極である。コムトに従ふと最高の科學である。六科

コムトの謂
ゆる物理

社會學の語
原

コモロシ

學の中、順序に於て先づ者は後の科學の基礎を爲すものである。即ち數學は他の凡ての科學の基礎であつて、社會學は生物學以下の五つの學を基礎とすべきものである。

コムトは始め社會學に對して社會物理の名を附けたが、これ物理なる語はコムト一流の用例であつて、記述に對する理論の學と云ふのと大差がないからである。然るに一八三八年「實證哲學體系」の第四卷に於いて、始めて社會學の學名としてソシオロジ (Sociologie) の語を作成した。ソシオロジの語は羅甸語の仲間友だちなどを意味するソシウス (Socius) の語と希臘語の知識又は學の意味のロゴス (Logos) との二語から出來て居る。故にその造語の合の子で不當であると云ふことは、當時コムト及びその建設せし新學に反對するもの、嘲笑の的であつた。或はこれをコモロシ (Comologie) と改むるの妥當なのを唱へたものもあつたが、スペンサーが此の文字を繼承して

コムトの川
語の注意

以後、この學が世に承認されると共に、その語も亦各國に於てそのまゝに採用せらるゝに至つたのである。

さてコムトの此の學術系統論に就ては、注意すべき點が尠なくない。第一はその用語である。コムトの用語は必らずしも今の科學上の術語と全く同一に解す可からざるものがある。物理の語のことは既に述べた。又コムトが生物學と稱したのは今の科學上の用例より云へば、實は生理學と心理學の一部とを包含せる、極めて廣義のものである。而して心理學の他の一部は社會學中に説かれてゐる。又コムトが天文以上の五科學を自然科學と稱するけれども、その自然の義は精神科學に對するものではなくて、神學及び形而上學に對しての現象の義と解すべきものであらうと思はれる。そはコムトは生物學及び社會學に於て精神現象を論ずるのを見ても知ることが出来る。此と同時にコムトが主として自然社會を眼中に置いて、人意社會を殆

生物學

自然科學

社會學の學
派の淵源

社會學の運
成立の理
由

社會學の建
設の理
由

んど論ぜないこと、及び社會を生物の集合と見做して、やゝ唯物的社會觀に傾きたる所多いことは、注意を要する所である。

次に學術系統に於ける各科學の關係、特に社會學はその以下の五科學を基礎とすべしと爲せるコムトの見解は、事實上の各科學の關係と相俟ちて、後に社會學に種々の學派の生じたる淵源なると、又た注目を要すべき所である。此點に關しては次章に述べる。又學術系統中の各科學は、各其下級の科學の完成を俟ちて始めて完成すると爲したるコムトの思想は、前節に述べた様に、少なくとも社會學の形成が、生物學其他の自然科學の進歩、及び社會的諸科學が漸く完成に近づける後に建設せられた事實を明かに説明せるものである。さて如上の見地に基づいて、社會學はコムトによつて建設せられたが、その哲學體系の本義から云ふと、コムトは社會學を建設するが爲に社會學を説いたものでなくて、實證哲學の完成の爲めに必然の

人道教

結果として社會學の建設に到達したものと見るべきである。而して實證哲學は智識は豫見せんが爲であるとして爲したその見解に基づき、進んで社會の理想もしくは規範の建設にまで進まうとした。「實證政學」に述べられた人道教的倫理觀は即ちこれである。或はコムトが社會學を以て最高又は終局の學であるとした初めの見解を棄て、更らに倫理學の建設の必要を感じたるものであると解する學者もあるけれど、これは恐くは妥當ではあるまい。コムトの始より社會學に期待した點から云ふも、社會學は勿論社會的科學としての倫理學に對して、基礎的原理の學である點から云うても、これは別に倫理學の建設せられたのではなくて、コムトの謂ゆる社會學が規範學であつた當然の結果だと見る可きである。

社會靜學
社會動學

コムトの社會學は二部に分れる。靜學及び動學である。靜學は人間社會の秩序の理論であつて、動學はその自然的進歩の理論である。

社會制度の
神學的時代の

その形而上
的時代の
その實證時
代

コムトは社會動學に於て、かの人間智識開展の三段階は、同時に社會進化の理法であるとして、神學的時代の社會制度の初步としては庶物崇拜、其發達せるものとして多神教、その終期として一神教の時代を説き、次に形而上學的状態の勃興として近代社會の批評時代を説き、終りに實證的狀態の勃興として社會改造の準備時代を説き、更に進んで革命的危機を論じて近代社會の終局的傾向を豫測した。

コムトはその哲學的理論として、社會學も亦他の科學と同じく理法研究の學であると爲したが、その實際に於ては未だ充分にその主旨を實現するに到らなくて、事實上その社會靜學は社會の秩序の記述、動學は社會進歩の自然史に終つた觀がある。其體系に於ても必ずしも完備しない。或は社會に關する記述及び理論の雜然たる排列に過ぎないとの批難を免がれない様である。されどもスペンサーの評した様に、その學說の規模の大なること、事實の考察の深いこと、

コムトの動
學及び靜學

後の學者に暗示する所が多いことなどは、皆コムトが思想家として前代に匹儔稀なることを證する。特に社會の意義及本質を捕捉し、始めて之が研究に着手せしコムトの偉勳は、何人も之を認めないことを得ないのである。

第六章 社會學の學派

スペンサー
綜合哲學の
大系

「社會靜學」

コムトの後を承けて社會學の成立を確實ならしめた者はスペンサー (Herbert Spencer, 1810—1903) である。スペンサーの社會學もまたその哲學即ち綜合哲學體系の一に屬し、宇宙的理法を以つて社會現象を説明したものである。綜合哲學の體系は第一原理、生物學原理、心理學原理、社會學原理及び倫理學原理から成つて居る。スペンサーの社會學に關する著述は夙に

「社會靜學」(Social Statics, 1851)

がある。此書は固より社會の研究には相異ないけれど、未だスペンサーの社會學の體系が整つたものではなくて、社會の靜的關係の一としての權利及び義務などの性質を明かにしようとしたものである。注意すべき點はスペンサーが斯學を以て人間の幸福をもたらしむべき

任務を有するとしたことコムトに同じく、而して欲望を以て第一原理から派出した社會的理法の一であると考へた點にある。然れども氏の社會觀の明かに發表せられたのは、一八六〇年に「エストミンスター」評論誌上に現はれたる社會有機體説、及び

「第一原理」

「第一原理」(First Principles, 1862)の著にある。次で

「社會學の研究」

「社會學の研究」(Study of Sociology, 1873)

及び

「社會學原理」

「社會學原理」(Principles of Sociology, 1879—79—96)の大著述出で、その

社會學の體系は始めて明かになつた此外スペンサーの監修の下に多數學者の協力によつて成れる。

「記述的社會學」

「記述的社會學」(Descriptive Sociology, 1874—81)

の大冊の著述があるけれども、これは社會學の人類學的資料の蒐集である。最も重要なのは「第一原理」及び「社會學原理」の二著述にある。ス

宇宙進化

ペンサーは宇宙進化の究明を以てその哲學の生命とし、此の進化の

物理的理法の應用

一段階として社會進化の理を明かにしようと試みたのである。されば氏は平均の理法其の他の理法を説き、社會現象を説明するに物理的理法を以てしようと試みた。然しながらスペンサーの社會觀の中

社會有機體説

心は社會有機體説にある。その説の當否は後に譲り、スペンサーの社會學は社會が統一體たることを明かにし、又れ之を支配すべき理法の存在を論證し、これによつて世人をして社會學の存在を公認せ

生物學的社會觀

しめたのである。ド・グレイフは、スペンサーが常に社會學に特有なる領域の存在を證明し得ざりし許りでなく、氏の推論は却つて生物學以上に社會學の存しないことを證明すると論じたのは、少しく酷に過ぎる様である。げにや「社會學原理」に於けるスペンサーの社會學が竟に生物學的社會觀に終り、その體系は事實上社會の過去及び現在の記述たるに止まるの觀あることは争ふことは出来ないけれど、第

スペンサー
の功蹟

社會の生物
學的研究

エリエンフ
ルト

シエフレ

一原理に於けるその哲學體系の本旨から見ると、これスペンサーの社會學體系が、綜合哲學の本義を實現するまでに進み能はなかつた事實上の不備に過ぎないのである。特にスペンサーが間接に社會學に與へた影響は頗る大である。すなはちスペンサーは記述的社會學に高い標準を供し、觀察や概括の卓絶せる方法を教へ、未だ完成しないけれども將來の社會學がその多くを採用しなければならぬ程の結論を示した事、スモール等の指摘せる所の如くである。而してスペンサーが科學的に論究せられた社會有機體説及び社會の生物的研究の開道者であつたことは注意を要する。

コムト及びスペンサー以後社會學の研究は斷然として起つた。リエンフエルト (Jillienfeld) の

「將來の社會學」(Gedanken ueber die Sozialwissenschaft der Zukunft, 1873—81) 及びシエフレ (Schaeffle) の

「社會體の構造及び生命」(Ira und Leben des Sozialen Körpers, 1875—78)

が先づ現はれた。此の兩氏は専ら社會の生物學的研究を試みた。特にリ、エンフエルトは生物學上の用語及び其法則を直に社會に適用し、極端に社會の生物學的考察を進めた。之に反してシエフレは社會の本質は有機體ではなくて有機的である。人間以上の有機體の別種類は認め難いと説く。即ちシエフレに於て既に社會を以て生物的實在であるとする唯物觀は、將に一轉せんとするのを見るのである。

次でルツールノー (Lecomte) の

「土俗學的社會學」(La Sociologie d'après l'ethnographie, 1880)

及びロベルチー (De Roberty) の

「社會學」(La Sociologie, 1880)

が出た。この兩氏は主として社會學の研究法に専心し、社會の自然史を基礎とする社會學を唱導した。ルツールノーの土俗學的社會學

ルツールノー

ロベルチー

社會自然史

は即ち此要求と一致したものである。ルツールノーはその他に人種學又は人類學的研究になれる記述的社會學の著書甚だ多く、斯學研究上有力の資料を供した。是より先きバスタチアン(Bastian)氏の著述に

「史上に於ける人間」(Der Mensch in der Geschichte, 1860)

「人種學的研究」(Ethnologische Vorschüngen, 1872)

「人種學前史」(Vorgeschichte der Ethnologie, 1880)

「人類學に關する通俗思想」(Völkergelanken in Aufbau einer Wissenschaft von Menschen, 1881)

等があつた。バスタチアンは人種學的研究に従事し、敢て社會學を説かないけれども、人間社會の法的關係から民族思想にまで研究を進め、事實上人類學的社會學を構成したやうな觀がある。ロベルチイ、ルツールノー等のむしろ先驅とも見るべき人である。バスタチアンは社會を自然科学的に研究したものであつて、自ら眞の科學は唯物論

バスタチアン

社會の自然科學的研究

をも認めない又唯心論を認むることは出来ない。そは兩者を包括するからであると明言した。これ直ちにコムトの思想に默契せるものと云つていふ。然れどもバスタチアンが民族思想を説き社會の法的關係を研究したことは、法理的研究に於けるサギニー等の説と共に、心理學上に於ける

リンドネル

「社會の心理學」(Ideen zur Psychologie der Gesellschaft, 1871)の著者リンドネル(Lindner)と相應して、一方には當時既にスペンサーの説を受けて唱へられたブルンチユリー(Brunschli)やアーレンス(Ahlens)等の國家學上に於ける國家有機體説に反省を興へたと共に、他方に於ては社會の心理的考察を喚び起したのである。

此等の學者の研究の發表に後るゝと數年の間に於て、社會學上重要なる研究が續出した。ワード(Ward)グムプロギツチ(Gumplovicz)フーイエ(Fouillee)及びドグレーフ(Da Greef)等の學説である。

ワード

ジョードには

「動學的社會學」(Dynamic Sociology, 1883)

「文明の心得要素」(Psychic Factors of Civilization, 1893)

「純正社會學」(Pure Sociology, 1903)

等の著述があり、

グムロキツチには

「人種競争」(Der Rassenkampf, 1883)

「社會學綱要」(Grundriss der Soziologie, 1885)

「社會學と政治學」(Soziologie und Politik, 1891)

等の著述があり、

フーイエには

「現代の社會學」(La science sociale contemporaine, 1885)

「觀念力の心理」(Psychologie des idées-forces)

ツケムプロ
チロ非

フーイエ

「實證主義の運動と社會學的思想」(Mouvement positiviste et la conception

sociologique du monde)

ドグレーフには

「社會學序論」(Introduction à la sociologie, 1836—39)

「社會的變態」(Le transformisme social, 1891)

等の著述がある。

ジョードはコムトの思想を受けて社會の實證的研究を爲したが、社會の本質に關しては、有機體であるとは云はないで體制たるを説いた。即ち社會とその各部との相關の有様は、有機體に於ける全部と部分との關係に同じきことを許した許りである。且つ人と動物との特異性は心的であるけれど、動物は感性知性等のみを有するに反して、人に特異なのは有目的(Tele)なるにある。随つて社會も亦有目的だと論じ、欲望を社會の原力だと爲したのを見ると、ジョードに

ジョードの説

テリツク

心理的社會觀

於て社會の本質に對する心理的社會觀の端緒を認むることが出来る。されどゾードの始めの思想では、心的作用は物質の最高の力と爲して居た様に見ゆる。又其考察法は生物的でなくて、綜合的だと云ふべきである。

綜合的研究

グムプロキツチの説

グムプロキツチに至つては、社會の心理的解釋は更に進んで、社會現象を以て全く心理的なりとし、社會を發生的統一なりと見て生物體と比較せる從來の有機體觀は全然誤りだと説いて居る。これ蓋し、一には氏が社會學は成立した社會の研究であつて、社會の成立以前の問題に立ち入るに及ばぬと云ふ見解を持して居る故、此議論から來つた結果とも見ることが出来る。唯心論的社會觀の嚆矢として、氏の學説は社會學史上に注目を値するものである。

唯心論的社會觀

契約有機體説

フイエ及びドグレーフは、共に社會を以て契約有機體だと解するに於て一致して居るけれども、その謂ゆる契約の意義は必しも同

ドグレーフの説

じくない。ドグレーフは社會と生物との嚴なる區別が、コムトによりても、又スペンサーによりても、未だ明にせられなかつたのを見て、此の區別を意志の要素に求め、之を契約なるものに見出した。

フイエの説

此點から言ふと社會の心理的考察であつた。然れども其研究の方法は必ずしも生物學的でもなく、又心理學的でもなくて、此兩面を綜合統一する研究即綜合的研究に傾いて居た。フイエの謂ふ所契約有機體は、その契約の意義に於て全くドグレーフに異なる。その要旨は社會契約説と有機體説との調和綜合にあつた。而して社會中に於ける個人の結合の力は、物的牽引力でもなく、化學的親和力でもない。心的の力すなはち謂ゆる觀念力だとして、心的に結合せられた有機體てふ意味にて契約有機體と名けたばかりである。契約の意味は唯だ心的と云ふと相距る遠くはない。而してその研究の方法が綜合的であつたのはドグレーフに同様である。

觀念力

社會學の分派

實證哲學の世に出でし以來約半世紀の間に於ける、社會學研究の大勢は上來述べた様である。此の間に於て、吾人は社會學研究の上に種々の學派の存在するのを見る。即ち社會觀の上から見ると、生物的社會觀及び心理的社會觀の二派、社會研究の基礎科學の點から見ると生物學的社會學、人類學的社會學及び心理學的社會學の三學派が存するのを見る。此の他なほ社會學の一分派に屬すべきものであつて、如上の叙述に漏れたるものが一つある。統計學的社會學はこれである。統計學的社會學は社會現象を大量觀察に基づいて考察し、以つて社會的理法に到達しようとするものであつて、ケトレイ (Quetelet) の

「社會及びその理法」(Du système social et des lois qui le régissent, 1848)

なる著書に現はれた研究に創まり、ルブレール (Le Play) の

「佛國に於ける社會改革」(La Réforme Sociale en France)

統計學的社會學

ケトレイ

ルブレール

及びメイヨール、スミス (Mayo Smith) の

「統計學と社會學」(Statistics and Sociology, 1877)

等の研究によりて繼承せられたものがこれである。

社會觀の異なるによつて生じた學派別は姑く措き、基礎科學の種類から來つた後の諸學派は、これコムトの思想から分出したものとも見ることが出来る。コムトがその學術系統論に於て社會學の攻究にはその以下の五科學の知識を要すとしたこと、并にその謂ゆる生物學は心理學をも包含することは既に之を明かにした。統計的社會學は數學を基礎とせる社會の研究である。人類學的社會學は生物の群としての社會の研究であつて、生物學的研究と共に、生物學の知識を基礎とする社會の研究である。心理學的社會學はコムトの謂ゆる生物學に含まれた心理學を基礎とせる研究である。又社會の本質に關する生物的社會觀及び心理的社會觀も、コムトが社會及心理現象

コムトの社會學

人類學的社會學

生物學的社會學
心理學的社會學

を共に自然的存在の一と見做した思想によると、社會は生物的現象だと見るか、心理的現象と見るかの觀察點の相異から來るまで、共にコムトの思想から派出したものと見難くはない。勿論、此等二觀四學派に屬する各學者が必しもコムトの思想に基づいてその研究を始めたかは疑問であるけれども、社會現象の性質から見ても、その到達した結果から見ても、學術發展の歴史に於ても亦有機的關係あることは、人間の思想發達の自然であるが故に、之をコムトに淵源せりと云つても不可はなからう。此四學派以外に、なほ異つた立脚地から社會を研究したものがあつた。歴史哲學、文明史、國家學及び經濟學の立場からする社會の研究は之である。歴史哲學及び文明史を基礎とするものは、同一淵源から出て後に二つの傾向に分れたに過ぎないから、之を史學的社會學とも稱ふる事が出来る。史學的社會學は既に述べた通りシュレーゲル (Schlegel) の

歴史哲學と
文明史

史學的社會
學

「歴史哲學」(Geschichtsphilosophie, 1828)

及びヘーゲルの

「歴史哲學」(Geschichtsphilosophie, 1838)

ギゾー (Gizot) の

「文明史」(Histoire de la civilization, 1828)

バックル (Buckle) の

「英國文明史」(History of Civilization in England, 1857)

等に起つて、一方にはリッペルト (Lippert) の

「文明史」(Kulturgeschichte)

「家族」(Familien)

シンコックス (Simons) の

「原始的文明」(Primitive Civilization)

其他の文明史的研究となり、地方に於てはバルト (Barth) の

シン
コク
ク

リッ
ペル
ト

バルト

「歴史哲學の問題」(Die Probleme der Geschichtsphilosophie, 1892)
「社會學としての歴史哲學」(Geschichtsphilosophie als Soziologie, 1897)

等の歴史哲學となり、屢々社會學と同一視せられ、又は社會學は歴史哲學や文明史があれば不必要であるとして妨げられたことがある。然れどもこれ實は社會學の一分派と見るべきものである。

國家學的社會學

國家學に基づける社會學にはローレンツ・シタイン(Lorenz von Stein)やブルンチェリー(Huntschli)や及びアーレンス(Arens)等の學者があるけれど、むしろ國家學の基礎として社會學に入り來つたものだと云ふべく、經濟學的社會學には、カウツキ(Kautsky)やワイゼンブリューン(Waisengrün)やロージャース(Rogers)や、フエリー(Ferri)やロリア(Loria)等があるけれども、これ前者と同じく、共に社會的科學から社會學に入れるものであつて、社會學を派として數ふるに足らぬものである。若しこれ等をも數ふべしとするなら諸般の社會的科學に基づく

マッケンジ

社會學が此他にもなほ多くあるであらう。たとへその研究の成果又は範圍のほゞ社會學と匹敵すべきが爲に、別に學派として見做すべしとすとも、前掲四學派と同位に置く可きでない。彼は社會學の基礎たるべきものから分たれた分類であつて、これは社會學から派出すべきものを本とするが故である。けれども學派の分類に就ては、學者の見解一様でない。マッケンジー(Mackenzie)は

「社會哲學序論」(An Introduction to Social Philosophy, 1890)

に於て、社會學を分つて常識的社會觀の蒐集である社會學、實驗科學の對象としての社會研究、及び哲學的分析により證明せられたる原理から社會の理法を研究する社會哲學の三派に分ち、バルトは分類的社會學、生物的社會學及び二元的社會學の三派と爲し、ノギコフ(Nogicoff)は有機體的社會學及び土俗學的社會學の二とし、ロリアは

ロリア

ノギコフ

バルト

社會學の學派及びその最近の進歩 (Die Soziologie, ihre Aufgabe, ihre Schule und ihre neuesten Vorschritte)

建部博士

ギンセント

に於て心理學的、生理學的、經濟學的及び比較的社會學の四派に分つた。建部博士は實在論の見地から、唯物論的、唯心論的、二元論的及び合一論的の四分法を取り、性質目的によつて記述的、實理的の二分法を採用した。ギンセント(Vincent)は此等の分類と全く異り、斯學發達の事實から見て、分類的、生物學的、有機體的及び心理學的の四派に分つた。蓋し其間錯綜あつて徹底せざるは事實上の變遷史的分類なるが爲だと思はれる。吾人はギンセントの分類に替し難いけれどもその分類の標準に至ては之と同様である。學術上の分類もその立脚地によつて種々ある。けれども學術史上の分類はその史的事實に基づくを以て最も妥當であると思惟するが爲である。しかあるべしてふ思想から演繹的に定めた分類の如きは、或る種の目的

分類の標準

の爲めには便なるべけれど、勢い事實を強ふるを免がれない。これ吾人が斯學發達の半世記の史實に基づき上陳の二觀四學派を分ちたる趣旨である。

さて約半世記の史實に基づき研究的態度から見たる社會學の學派は上の如くである。然るにその性質から見るに、統計學的研究は、客觀的事實研究として、社會的理法を暗示するに於て價值あるけれども、大量觀察に依て得たる社會的事實の傾向は、更に之を合理的に解釋すべき基礎的原理を要するが故に、事實上物質的解釋を取つて生物學的社會學又は心理學的社會學の何れかに歸適せざるを得ない。人類學的社會學に於ても亦さうである。統計學的社會學は社會的量的記述であつて、人類學的社會學は史實上の記述である。社會的理法の研究を爲さんとせば共に他の説明の基礎を借らなければならぬのは一である。兩者は社會研究の資料たる價值を有するばかり

總評

である。その説明的演繹的研究に關しては又心理學的若くは生物學的社會學に没入すべきは言ふまでもない。而して社會學本來の目的は理法の發見にあるが故に、社會學上重要なのは他の二學派だとはなければならぬ。今や社會の生物觀と心理觀とを本として、此三學派の發達の概觀を述べやうと思ふ。

第七章 社會の生物的考察

レギアサン
 コムトの比
 諭
 の有機體
 點社會と類
 點體との類
 點體との類
 點體との類

社會と生物との比較が個人の能力と國家の諸階級との比喩によりて、夙にプラトンの思想に淵源を有することは既に述べた。又たホッブスは「レギアサン」(Leviathan)なる著書に於て兩者の機關及び機能の類比を試みて居る。しかもこれ詩的想像に止まつたものと云ふてもよい。コムトは人と動物とを比較したが、仔細にその異同を檢覈したのではない。否コムトに於ては、却て人間思想の變遷の理法と社會體制の進化の理法との比較、すなはち心理的現象と社會との比較が、一層進みて試みられたことが見らるゝ。スペンサーに至て社會と有機體との比較は、始めて科學的考察を得て、謂ゆる社會有機體説が學理上に現はるゝに至つたと云うてよいのである。

スペンサーは社會と有機體との類似を六ヶ條に分け、その相異を

生長
分化
相互作用
全體の生命
と部分の生命
社會も亦有
機體なり
社會と有機
體との相違
密集と離隔
心物的の力と

三ヶ條に分けて居る。(Pr. of Soc. Vol. I. pp 437—450)。其類似の第一は生長及び生命の連続で、第二は體の増大に伴なふ機關の複雑即ち分化、第三は機能の分化、第四は機關及び機能の間の相互的關係であつて第五に兩者は共に有機的單位の結合であること、第六に全體の生命と成素の生命との獨立であることの六ヶ條である。此六項の事情は生物體に於ても社會に於ても共通に存するものなるが故に、生物體がこれあるが爲に有機體と稱せらるゝとすれば、同じき事情を有する社會をも亦有機體と稱するも亦何等の不可はない。然るに、通常有機體と社會有機體との間には相異の點が三つある。生物的有機體にあつては、各部は相接觸して集合を爲して居る。之に反して、社會にありては各部分は離隔して存在する。すなはち細胞に當るべき各個人は自由である。加之多少廣く散在して居る。これがその第一の相異である。されば生物的有機體は直接に部分から部分に傳ふる

意識の集中
と分散
相異は此三
つに止らぬ
有機體の概
念

物質的(即ち理化學的及び生理的の)力によりて其働を爲すけれども、之に反して、社會にありては人から人に傳へられる感情及び思想の記號を通じて互に協力する。故に離隔するに關らず一體として協力をすることが出来る。これ第二の相異である。終りに兩種の有機體に於ける最も重要な差異は、生物に在りては、意識は細胞集合の一局部に集中せられるに反して、社會有機體にあつては、集合の全部に散在することである。是れその第三の相異である。スペンサーは差異の點を此の如く三項に約したけれども、仔細に研究するときには、相異は實に此三點に止まらぬ。類似の六項中にもなほ多少の相異の存することは固よりである。故に氏も亦社會の成長を詳論し、統制系統を論ずる條下などには、更に精細にその異同を明かにしたのである。スペンサーの考によると、前の六項の類似は有機體の概念の中樞である。固有性である。後の相異の三點は生物的有機體と

超有機體

相互作用の
重要

心理的
關係の
重要

社會有機體との要差である。即ち有機體なる類から社會てふ種を區別すべき特異點である。社會有機體はその成素に於ても生物的有機體よりは高等であつて、その關係は自由である。生物進化の上から見ると、生物有機體を超越せる一層高等な有機體である。故に之を超(絶)有機體 (Super-Organism) と稱したのである。スペンサーが此の兩有機體の異同を檢査した諸點に就て、特に注意すべきものがある。即ち氏が類似の點だとして挙げた六項中、第四項即ち部分の相互關係に重きを置けることは其一である。此相互作用は通常有機體にありては機關及機能の生理的協力即ち分業に過ぎないけれども、社會にありては心理的相互作用なる後社會學者特に心理的社會學者の論究證明せし所である。次にはスペンサーが超有機體の特異性として挙げた三項中、その主要な二項は心理的現象であつて、後の社會の心理的研究者にとつて最も重要な問題となつた。さればスペン

社會の心理
考察の起
點

エルト、
エンフ

ホルヂ
エー

サーの社會學は社會の生物的考察には相違ないけれど、なほコムトの學術系統論が後の社會學の諸學派の淵源を爲したと同一の意義に於て、社會の心理的研究もスペンサーの思想に胚胎せりと云ふ可きである。スペンサーの超有機體説が一たび出で、から、之を繼承するもの多く、獨逸の國家學者中又その祖述者が少なくなかつた。社會學の領域に在りてはリ、エンフエルトは之を受けて、更に極端な生物的類比を追究し、後の著書、

「社會病理學」(Pathologie sociale, 1891)

「社會學に於ける有機的方法」(Zur Vertheilung der organischen Methode in der Soziologie, 1898)

に於てもなほ極端なる有機體説を固守して居る。ボルヂエー (Bardier) も亦其著

「社會の生命」(La Vie de la société, 1887)

に於て社會を以て生物と爲し社會學は生物學の一分派に過ぎぬと述べて居る。

シエフレ
 社會と生物
 みの類比の
 ナトド
 低級有機體

シエフレも亦大體に於てスペンサーを繼承し、生物學的研究を爲せりと雖も、社會が生物的有機體でないのを認め、兩有機體の異同を成素、機關及び組織の三項に分て論じ、以てスペンサーの社會有機體説を補ふた。(Tr. and T. Brit. S. 18—23)。即ちシエフレは生物と社會とは類比に止まり、同一類に非すと爲すのである。是等諸氏は皆社會と動植物の如き生物的有機體とを對比せしめたものであつて、有機體の概念を社會に適用したるものではない。然るにナトドは、生物と社會との比較に於て最も重要なるは神経系統であつて、此點から見ては社會は高等有機體でなくて、最低級の有機體である。(社會學綱要 Outline of Sociology pp. 60—62)と説く。是表面から見れば、社會と比較せらるべき有機體を高級から低級に下したるものであるけ

有機體説の一轉

ド・グレイフ
 フーイエ
 十二項の差異
 全體と部分
 存續の期間
 機能と構造
 分化の相異
 生殖の方法
 成長の無限
 生殖力

れど、實は有機體と實在との比較を去りて、有機體の概念に移らうとする一轉化の兆である。

社會有機體の觀念に著しき變動を與へたものは、ド・グレイフ及びフーイエであつた。ド・グレイフは有機體と超有機體との差異を數へてその十二を得た。(一)前者にありては部分は全體より離れて存在し難く、後者に在ては之に反する。(二)前者の部分の毀傷は全體の存在を危くするけれども、後者はさうでない。(三)後者の存續は前者に比すれば遙かに長い。(四)後者に在つては、變化の繼續は長く且つ急である。(五)機能と構造との併進的分化は後者に於て特に著しい。(六)分化は後者に在りては機能及び機關の獨立によりて調和せらる。(七)前者は有性無性の生殖により、後者はそれ以外に種々の方法によりて増加する。(八)前者では成長は限あるけれども、後者には限りはない(九)前者に在ては體の複雑と共に生殖力を減するけれども、後者に在て

機關及び機能の關係

要素の差

獨立と自由

之に反する。(十)前者に在ては機關及び機能の關係は整一で且つ同時的であるけれど、後者にあつては時間的に間隔がある。(十一)後者は有機體ばかりでなく、無機體をもその要素とする。(十二)前者の單位は單純なる細胞であつて、各自の獨立は殆どなく、全體に服従すれども、後者のそれは知能を備ふる人間であつて、各獨立と自由とを有する。(Introd. à la soc. Vol. I.)。此の十二項の差異は、必ずしも生物と超有機體との差別を悉してその要點を得たとは云ふことは出来ないけれども、若し社會を生物的有機體に比較するとしたならば、スペンサーが類似の點として挙げた六項の中にでも、なほ兩者の間に甚だ相異なることを明かにし、スペンサーの説を補足するに足りる。けれどもド・グレイフの有機體説に與へた影響は此の様な微細な點ではない、グレイフの説に重要なのは、此差異の中最後の點に特に重きを置き、此點から出發して、契約の思想を開展したことであ

グレイフの説の主要なる點

契約の觀念

る。即ち社會の成員である各人は獨立と自由とを有するけれども、社會へて系統一體を爲すに至つたのは、各自其獨立を多少制限するの應諾を與へたものである。各人は先天的に社會を爲すべき約束のあるではなくて、明に意識するとせざるとの別はあるけれど、此應諾即ち契約あるによりて社會は成立する。換言すれば各人は契約の自由あるに於て獨立である。此契約的有機體の思想は謂ゆる民約論に淵源し、スペンサーが兩有機體の差異の第二として數へたる、社會は思想感情の連鎖により結合せられると爲す思想から出發して、此心的連鎖を契約と見たるものである。さればグレイフの社會有機體説は、生物的有機體との對比に拘泥する所あると同時に、一轉して社會の本質の心理的解釋に一步を踏み入れたものだと云ふべきである。

此思想の由來

フーイエ

フーイエも亦社會有機體に關して、生理的並に心理的證明を試み

生理的論證
協同
生命
運動
發達と衰退
即ち進化
心理的論證
物的交通と
心的交通と

た、(Soc. cont. Phil. II, pp. 78-100)。其生理的論證に於ては之を六項に分ち、(一)體の各部の協同、(二)機能に適する構成、(三)全體としての生命は分れて各部分の生命中有ること、(即ち終局の平均によつて連結せる多數の生命)、(四)運動の隨意、(五)内部の終局性(Finale Intention)即ち社會にありては終局性は機械的作用に代り、之によりて部分の間には一致あつて、全體の觀念に従屬すること。(六)發達及び衰頽即ち進化の存することは、社會が有機體なるを證するものであつて、些少の相異ありとも、兩者同一なるは争ふ可からざる事である。次に心理的に考察するに、通常有機體と社會との差異は、その類似の點に比すれば實かに小であつて、爲に生理上から論證せる社會有機體の觀念を妨ぐるに至らぬ。加之心理學上よりも社會の有機體なるを證明し得る。通常有機體にあつてはその成分の間には生理的交通がある。之に反して社會にありては、心理的交通が之に代るを異り

不可離の關係

感覺性の程度の差のみ程

契約有機體説

とするのみである。此相異は普通に兩有機體の區別とせられ、之に由て社會の有機體なるを否定せんとする人もないではないが、此兩様の状態の間には離す可からざる關係がある。體制と生命のある所やがて感覺的寫象又は働作の交換の存する所であつて、感覺性(Sensibility)は兩者に共に存するが、たゞ程度の相異があるのである。感覺性の度の多少は竟に有機體の觀念を妨ぐるに足らぬとは、氏が心理的證明の要點である。此點から見るに氏は社會の有機體觀に拘泥する所がある。併しながら氏が内部の終局性を兩有機體の類似點として説く點は注意を要する。即ち氏は此點から出發して社會を契約的有機體だと主張するが故である。フレイエは一方に社會が有機體なるを主張しながら、他方には契約的有機體説を主張する。氏は社會の解釋上に、有機體説と契約説との二つがあつて、互に對立して居るが、前者は社會に於ける一切のものを自然の宿命的法則に歸納

兩説の綜合

しようとし、後者は自由なる意志の活動に歸せようとする。しかし此兩説には調和の道がある。決して眞理は相反する二つの中間にあると云ふ様な考ではないが、此二つの説には互に眞理があつて、又缺點もある。完全な眞理はその科學的綜合に存する。吾人は社會の有機的研究に於ては極端な比喩まで試みる獨逸風の學者にも劣らぬが、近世の社會に於ては、統治の方法學理も次第に契約を重んじ來つたのであるから、契約と云ふことを無視する譯には行かぬ。社會より國家に至り、社會的より政治的に至る間に連續はあるが、人類の存する所には必ず社會がある。社會のある所にはその成員の間に程度の多少はあるが、必ず潜んで居る意識と合意とがある。この意識と合意とに依て建立せられた社會有機體は、やがて契約有機體と稱してよい。そして此の合意即ち契約を爲さしむる力は觀念力である。とはフーイエの契約有機體説の要點である。

フーイエが契約有機體説の主唱者として、社會本質の心理的解釋に先驅たることグレイフに同様である。又内部終局性の觀念はフーイエの有目的の觀念と相聯關して、後の社會の基礎觀念を目的の中に求めんとする説を誘致した様に見える。

ノギコフ

ノギコフ (Novicow) が

「社會學的思想に就て」 (Essai de notion sociologique, 1895)

「人間社會に於ける競争」 (Luttes entre sociétés humaine, 1896)

「社會意識及び社會意志」 (Conscience et Volonté sociale, 1897)

等に於て述べて居る學說によれば、氏は社會有機體に關して更に直截簡明なる思想を有して居る。氏は社會と有機體との相似は想像的でなくて實際なるを主張し、此説あればこそ社會學は近代の發達せる科學の大本に一枝の地位を保つに足るのであるとまで斷言した。此と同時に、氏は又社會有機體と動物體とは形態上に於ては類比な

社會有機體の觀念の必要

脳髓と政府

きことを認め、唯生物學的法則即ち生命に關する一切の法則は、また社會有機體に適用し得きことを主張した。(Cons. of Vol. soc. pp. 1-30) ノギコフは自分では敢て社會有機體と生物體との類比を詳論しない。然れども氏の社會有機體に關する觀念は通常謂ふ所の説と、稍趣を異にするのは明である。即ち氏は、普通に生物體の腦と社會に於ける政府とを比較するに反して、政府を以て單に腦の一機能に相當する職能を有するのみであつて、その全部でないと論じ、此點より見て社會は高等有機體の一類には相異ないけれど、なほ未だ幼稚な状態にある。そは通常の有機體にありては腦の機能は既に無意識的となつて存するけれども、社會にあつては、腦の一機能と見るべき政府はなほ未だ無意識的となるまでに進歩せざるが爲である。これ前に述べたるゾードの見と、結論に於ては同一である。ノギコフは社會有機體說に對する批難を四項に約して之を反駁した。第一

非有機體說の反駁

密接と散在

感覺性と意識

の批難は通常有機體は生活ある部分の密接なる集合であつて具體的である、然るに社會の部分は分離せる關係にあるから有機體に非ずとするにある。けれどもこれ空間の觀念に拘泥したるものである。空間の觀念は相對的であつて絶對的でない、之が爲に有機體の性質を社會に認めないのは謬見である。第二の批難は、有機體は唯生活あるのみなる部分から成り、之に反して、社會は思考力あるものから成るのである。これ兩者の根本的相異であると云ふにある。然れども有機體特に人體には化學運動と生活力とがある。生活力あるは即ち感覺性あるのである。感覺性と意識との差は只度の差に過ぎないのは、ヘッセル等の斷言する處である。(此點はフレイエに同じ)。されば人は化學的運動と生活力とから成れる二重結合であつて、社會は此外に心理的分子を加へた三重の結合である。此相異は未だ社會有機體說を否認するに足らぬ。第三の批難は社會にして若し實在

化學的運動と生活力
三重の結合

分子間の競争

目的と自由行動

的なる且つ生活あるものだとせば、其分子の間に存する競走は解し難いと云ふにある。けれども有機個體にあつても、其細胞の間には不斷の競争がある。されば此批難も亦以て社會の有機體たるを拒むに足らぬ。第四の批難は、社會に於ては其成員は各自の目的に従て生活し又行動するを得るけれども、有機體の機關又は細胞はさう云ふ目的もなければそんな働をする事も出来ぬ。故に全く別種のものだと爲すにある。されどこれまた生理的知識の不完全なるに由るのである。此論は社會に於てはその分化の度が、通常の有機體より遙かに進歩して居ると云ふに過ぎないので、證する處程度の差ばかりである。これノギコフが有機體説の反對論に對する反駁である。以て此の社會有機體の觀念は、既に具體的類比の域を去つて、社會に對して有機體の抽象的觀念のみを適用せんとするに傾けるを見る事が出来る。而して、有機體なる抽象的觀念から出發する社會の

有機體説の一轉

マツケンジ

有機體の概念

社會有機體の眞意義

解釋はマツケンジによつて試みられた。

マツケンジは有機體とはその部分が密着に結合し、内面から生長し、且つ本來の性質に含蓄せられた目的に依憑せる、(即ち目的に従つて活動する)全體だと解釋する。即ちマツケンジは、有機體の概念に就て、一に部分の密着なる關係、二に内部生長、三に内在目的、及び四に統一の觀念を重しとしたのである(Introd. to Soc. Phil.)。

是に至りて社會有機體説は全く具體的形態的意義を離れて、抽象的となつた。換言すれば社會有機體とは社會が有機體なる概念を構成する本質的觀念の總てを適用し得べき統一體である、即ち有機的存在であると云ふ様になつたのである。而してその有機體の意義に就ては、人によつて見解を異にするけれど、大體に於て生長及び發達の觀念、部分の相互的協同(及び之に伴ふ構成)の觀念、及び變化中の統一の觀念を其中に含蓄せしめるのは一である。この統一が如

生物觀と心理觀との分岐點

何なる種類であるかは、即ち生物的社會觀と心理的社會觀との分岐點である。

生物的考察の變遷

社會の生物的考察は前述の社會の生物的有機體觀を中心とし、主として類比に基く社會の生物學的研究及び物質的理法の適用が之に伴ふのである。而して生物學的研究はスペンサーに始まり、エンフエルトに至つて其極端に達し、社會形態學、社會解剖學、社會生理學、社會病理學等の目を立て、生物學との類比的研究に耽つたが、シエフレを経て次第に心理的考察を加ふるに至り、現今に於ては或は心理的研究と併用するか、もしくは兩者を綜合した研究に進みつゝある。之と同時に物理的又は生物的法則を直ちに社會に適用した傾向も、次第に變遷して、その研究法と同様な方向を取るに至つた。謂ゆる生物學的社會學とは、社會の本質に關しては生物的有機體觀を取り、その研究法は専ら生物との類比を追ひ、物的法則を直ちに

社會形態學
社會解剖學
社會生理學
社會病理學

兩面的考察

綜合的研究

生物學的社會學

社會に適用せんとする傾向に對して與へられたるものであつて、事實に於ては如何に極端なる社會の生物的有機體觀を取れる人々であつても、決して社會現象に於ける心理的要素を全く無視した譯ではない。されば社會の生物觀は直ちに生物學的社會學を爲すものではない。此兩者の間には自ら區別がある。例へばグレイフ及びブライエは社會の本質に就ては生物的有機體說を取つたが、純然たる生物學的研究を試みたのではなく、又ノギコフに至りては、その研究法は全く心理學的であつたのである。

第八章 社會の心理的考察

其一 社會の根本現象の研究

コムト以後の社會の心理的考察は、二様の方向を取つて進んで來た。一は社會現象の本質及び基礎觀念、若くは特異な現象は何であるかの研究であつて、他は社會意識と云ふものゝ研究である。然れどもコムト以前にあつては此兩様の研究は必しも區別せらるべきものではなかつた。今コムト以後の社會學に於ける心理的考察の由來を明にするが爲には、溯りてその大勢を觀察するの必要があるのである。

社會の心的現象に關する思想は、詩的、想像的又は比喩的の言ひ現はし方としては、社會有機體の觀念と同じく古くから存したけれども、其や、科學的に考察せらるゝに至つたのは、民約論の思想を

二様の研究

基礎觀念の
論究

社會意識の
研究

コムト以前

比喩的見解

民約論

總意說

契約の觀念

契約有機體

集合意識

世界精神

以て始めとすべき様である。民約論の思想は淵源をエビキュロス又はその以前に有して居つて、中世の哲學者スコートス及びトーマスによりて繼承せられ、謂ゆる總意說なるものを生じた。すなはちホッブスに至りて人民の意志なるものが認められ、ロックは之れを共通意志(Common will)と名づけ、ルーソーに至りて一般意志(volonté générale)の說となつて民約論は大成せられたのである。これ社會意識の觀念の源流である。これと同時に社會は契約に依つて生じたものであると云ふ思想は、社會の本質が契約なることを暗示し、以つてグレイフの契約説や、フーイエの契約有機體説を生せしめた。他方に於ては比較法學者の唱へた國民權利確信の說の如きは、ザントの集合意志(Gesamtwille)の說と共に社會意識の研究であつた。此等と立脚地を異にせる純正哲學の方面に於ても、ブラトーンは世界精神(Weltseele)と稱する各個人の精神と異なつた一種の精神が存在すると説い

客觀精神

意志發現

三つの暗示

心理的社會

内在説

超在説

目的性

契約

契約有機體

だが、此の説と遙かに呼應してヘーゲルの汎理説 (Panlogismus) の立場から來つた客觀精神論がある。又ショーペンハウエルが其の汎意説 (Pankeilismus) に本づいて法は根本原理としての意志の發現であると説いた學説もある。這般の哲學的考察の中に三つの暗示がある。社會契約に本づく社會の本質に關する心理的社會觀はその一である。同じく民約論が社會意識は社會生活の産物であると見做した内在説 (Immanenztheorie) はその二である。ヘーゲル及びショーペンハウエルの説の如く、各個人の精神とは全く異つた精神があると説く所の超在説 (Transcendenztheorie) はその三である。

コムト以後の社會學に於ては、フォードによつて社會の特質が其目的性 (telos) にあると認められ、ドグレフによつて契約の觀念が更に進歩せしめられ、フレイエによつて社會有機體の内部終局性から出發して、社會の(觀念力によつて結合せられたる)契約有機體説

社會の心理

現象界の三分

人は二元的存在なり

精神的現象
社會現象

が唱へられたことは既に述べた。されど此等の人々は社會の有機體觀に就てはなほ未だ生物學的意義に拘泥する所があつたが、グムプロギッチに至つては敢然社會を以つて全く心理的現象だと主張した。氏はおもへらく從來の社會學の根柢的誤解はその有機體説にある。これ現象の分類的研究に於て未だ至らなかつたが爲である。現象界は分て三とする。無機界、有機界及び心理界これである。人は肉體としては有機界に屬するけれども、その精神現象は心理界に屬する然るに人の結合から成る社會現象なるものがある。社會は肉體としての人の集合ではない。社會の統一はその心理的交通にある。故に心理界は更に分れて二となる。精神的及び社會的これである。精神的現象を論ずるは(個人)心理學である。社會的現象は即ち社會學の對象であつて、全く心理界に屬する研究であるとは、グムプロギッチの考であつた。即ち氏は社會の本質を以て心理的であると明かに喝

唯心論的社會觀

社會的鬭爭の融和

心的鬭爭

ラッツェンホーフェルの政治の本質及び目的

述べた點に於て、純然たる心理的社會觀を有して居つたので、謂ゆる唯心論的社會觀の嚆矢であるとも云つていゝ。然れどもこの思想も亦既にスペンサーが超有機體と通常有機體とを區別した第二項及び第三項の思想の中に存したとも見られる。そして又たヨード及びフーイエの目的性又は終局性の思想と相通する所があるのは、忘れてはならぬ。またグムプロキッチは社會の部分と部分との衝突即ち鬭爭が同盟によつてその融和に移り行く過程を以て、社會の根本現象であると考へた。グムプロキッチによつて提唱せられた社會的鬭爭の觀念はノギコフによつて繼承せられ、強迫、掠奪、專有、持權等の形式を経て、心的なる高級の鬭爭、即ち爭議の形に變じ行くものと説かれ(Les Luttes entre sociétés humaines) 又た

ラッツェンホーフェル(Ratzelhofer)はその著書

「政治の本質及び目的」(Wesen und Zweck der Politik, 1893)

「社會學的認識」(Die soziologische Erkenntnis, 1898)

「社會學」(Soziologie, 1907)

等に於ては、所謂社會的鬭爭と云ふのは、社會の各部分の間の利害關係の鬭爭であると見て、競争團體の説を爲し、

シゲール(Sighele)の

「黨派の心理」(La psychologie des Sectes, Paris 1893)

マルクス

の研究に於ても、マルクスの有名なる階級競争の思想に於いても、

ロリア(Loria)の

「社會の經濟的基礎」(Bases économique de la constitution sociale)

ロリア

の中に説かれたる階級利害の支配なる思想に於ても承認せられ、

ヴツカロ(Vaccaro)の

「法及び國家の社會學的基礎」(Les bases sociologique des droit et de l'état,

ヴツカロ

1898)

の中にも亦同様の思想が更に開展されたのである。

社會の心理的考察はタルド (Gabriel Tarde 1813—1904) の

「模倣の法則」(Les lois de l'imitation, 1890)

「社會論理」(Logique sociale, 1895)

「普遍的なる反對」(L'opposition universelle, 1897)

「社會的理法」(Les lois sociales, 1899)

「社會心理の研究」(Études de la psychologie sociale, 1898)

等の研究によりて更に大に歩を進め、社會の心理學的研究は俄然として勃興するに至つた。タルドの學說の發足點で、又その中心となつて居るのは模倣説である。

模倣と云ふことを學理上で説いた人は珍らしくはない。藝術上での模倣説などはアリストテレスの詩論にも既に見えて居る。併しながら社會の基礎觀念として模倣と云ふことを説き、そして模倣と

タルド

模倣説

模倣の
新解

法則と反復

云ふことを廣い意義に解して、模倣すると云ふ心理作用が人間の社會的生活に於ける根本的のものたるを明かにしたのが、タルドの模倣説の特徴であつて、且つその功績である。タルドに従へば社會に於ても、物質界や生物界に於けると同様に、法則があつて支配して居る。法則と云ふのは秩序である。現象が一定のリズムを爲して、常に同様の順序で現はれて來る所に法則がある。即ち同一現象の常に同様に反復せらるゝのはやがて法則を爲すのである。物理界の振動又は波動、生物界の生殖などは省反復であつて、茲に理法が支配して居る。社會現象は極めて複雑で規律がない様に見えるが反復の作用は常に存する。社會中に於て人が他人の觀念や、慣習や、さては身振などを反復するのは模倣である。人々が社會中に於て心的交通を爲すとき、必ず他人の觀念を受け、又他人に自己の思想や感情を與へて、互に變化させたり變化したりするのである。云ひ換へれ

模倣の意義

模倣の法則

發明

慣習模倣と
様式模倣

ば互に模倣するのであつて、この模倣こそは社會の根本現象であるとはタルドの説である。されば氏の模倣と云ふ語は通常の用例よりは遙かに廣く、物質の振動、生物の生殖に於ける反復と同様の反復作用を云ふのである。そこでタルドは模倣の作用を研究して三つの法則を定た。第一は模倣は障礙のなき場合には幾何級數的に傳播する事である。然るに人間が他人の觀念や風俗やを模倣するには其儘には受け容れぬ。自己の創意や觀念やなどに影響されて多少の變化をする。そこで第二の規則は、模倣はその傳播する毎に多少の變化を受くと云ふに在る。此變化ある模倣はタルドの用語例によれば發明である。そして模倣の道程は、先づ内部より外部に來る、即ち他人の所作や行爲を模倣する前に、内部的なる其觀念を模倣して次に外形に及び、次には模倣は優者より劣者に及ぶ、即ち上級から下級の方へ感染して行く、第三の法則は慣習模倣と様式模倣とは反對に

社會的理法

デュルケム

働く」と云ふのである。慣習模倣とは在來の慣習杯を其儘模倣するのを云ひ、様式模倣とは新に創意を加へた謂ゆる發明の模倣であつて、前者の強い時は後者は弱く、後者の強い時前者は弱いのである、此がタルドの模倣の法則である。タルドは此見方から進んで社會の理法を説いて、反復と反對と適應との三つに歸して居る。單純なる模倣即ち反復と、變化された模倣即ち發明とが互に對立するが、やがて兩者は相融和し適應する様になつて行く」と云ふのである。此見解はヘーゲルの思想發達の三段法と名づけた正反合の三段開展と規を一にする」と云ふべきである。

タルドが社會の根本現象は各人が他人の觀念や慣習を模倣するに在ると見たのを、逆に結果の方から觀察したはのデュルケム (Emile Durkheim) の説である。氏の重なる著書は

「分業論」(De la division du travail, 1893)

印象説

「社會學的方法の規則」(Les règles de la méthode sociologique, 1895) であつて、氏の説は印象説と呼ばれる。印象と云ふ語は心理學などでは、主観の上に外界の刺激が與へた結果を云ふのであるが、社會學では各個人が他の人格又は社會的外圍から受ける直接間接の影響の爲に、多少強制せられるのを云ふので、チルケームはタルドが能動的と見て模倣と名づけたと同様の社會現象を、結果の方から觀察して、個人の心意が他人の行動や思想や感情やによりて支配せられ強制せられて、印象を生ずるのが社會の根本現象であると説く。すなはち模倣説は主観的解釋で、印象説は客観的解釋であると云ふても宜しい。此説は又強制説と呼んでもよからうと思ふ。

契約と同盟

グレイフが契約の説より出で、社會現象は強制から契約に移り行くとなし、グムプロキチが社會的闘争が同盟によりて解消せらるゝとなした二つの意見、即ち契約及び同盟の二提説と、タルドの模倣

模倣と印象

及びチルケームの印象の二提説との間位を取り、模倣及び印象の現象は社會的ならぬ生物の心理現象にも亦見る所であつて、これに反して同盟及び契約は社會あつて後に見る所である。換言すれば同盟と契約と云ふ二つの現象は社會的と名づけられる現象よりも範圍が狭く、模倣と印象の二現象は社會よりも廣いのである。されば眞に社會的と名づくべき現象の特異な點は、此中間にあるべきだとの説を爲したるものがある。即ちギディングス。(Franklin H. Giddings) である。ギディングスの主たる社會學上の著述は

ギディングス

- 「社會學の理論」(Theory of Sociology, 1894)
- 「社會學原理」(Principles of Sociology, 1896)
- 「社會化論」(Theory of Socialization, 1897)
- 「社會學要義」(Elements of Sociology, 1898)
- 「歸納的社會學」(Inductive Sociology, 1901)

「記述的歴史的社會學」(Descriptive and Historical Sociology, 1906) 等である。

同類意識説

並に社會的
二面的存生の
物的心的

社會の物的
説明

社會の心的
説明

ギデングスの學説の中心は同類意識の説である。氏の説によれば社會は一面に於ては物的なれども、他の一面に於ては心的の存在である。されば社會の眞の説明眞の解釋は、物質科學の用語を以てする物的解釋を與ふると共に、他方には精神科學の用語を以てする心理的説明を兼ね備へなければならぬ。然るに社會の物質方面の説明に就ては、スペンサーを始めとして多くの學者によりて既に試みられて、やゝ備はつて居る。之に反して社會現象の心理的關係に就ては、その進歩が極めて少なく、未だ充分なる解釋を得て居らぬ。此方面の研究が目下の社會學の急務である。勿論心理的説明に就ても、從來學者の提出した案がないではない。すなはち契約及び同盟とか模倣及び印象とか云ふ様な説はあるが、前の二者は社會より狭

同類意識の
意義

同類意識の
内容

社會化力

く、後の二者は之より廣いから、眞に社會的と名づくべき心的特質は此中間になければならぬ。此の考からギデングスは社會の根本的觀念を尋ねて、同類意識なるものを見出したのである。同類意識とは意識あるもの(即ち動物や人間)が、他のものを自己と同類なりとして認むる意識を云ふのである。此の意識は第一に無生物を生物から區別し、次に植物から動物を區別し、又た政治的經濟的から社會的のものを區別し去つて、眞に社會的と云ふべきものを吾人に示すのである。社會化論に於て明かに分析された所では、同類意識は類同の知覺と云ふ知的作用と、好み又は嫌ひの情をも含めての同情と云ふ情的要素と、他のものから認められたいと云ふ欲望即ち意的要素との三方面の要素を内容として居る。同類意識は社會の基礎觀念たると同時に、又た社會化の力である、故にギデングスは社會化の作用を社會の根本現象なりと見做して、社會學は或る意味にては社會

化の研究であるとまで云うて居る(附録社會化論の概要を参照せよ)。ギザングスに取ては同類意識の説はその學說の中心であつて、社會意識の現象もこれあるが爲めに生じ、社會的結合も此に基づいて保たれ、一切社會現象の心理的解釋はこれに由て與へられるものであると見做されて居るのである。そして此の觀念中に含まれた同情の觀念は、アダム・スミスが謂ゆる同輩感(Fellow-feeling)とか同情とか云ふものを、社會的結合の根柢であると見做した説に由來するのである。

ジンメル

此他社會の心理的基礎を個人意識の現象に求めたものにジンメル(Simmel)やオーリウ(Haurion)やポールドキン(Baldwin)等の學者がある。ジンメルの主たる著は
 「社會分化」(Soziale Differenzierung, 1890)
 「社會學」(Soziologie, 1908)

オーリウ

ポールドキン

等であつて、オーリウには
 「傳承的社會學」(In science sociale traditionnelle, 1896)
 ポールドキンには心意發達の
 「倫理的及び社會的解釋」(Ethical and Social Interpretation, 1895)の著述がある。

純主觀的解
釋

ジンメルは團體の統一を服従、忠義及び群の名譽の如き觀念に究めやうとし、オーリウは社會の基礎的現象を、(一)團體及び團體感情(二)個性及び個人的感情、(三)此等の融和と云ふ現象にありとし、ポールドキンは兒童の心的發達を觀察して投影的プロジェクティブ、主觀的及び投觀的エジクティブ(objective)の三段開發にありとして、之を心的發達の辨證法ディアレクティブ(dialctic)と名づけ、此法則を社會に適用して、社會の純主觀的解釋を試みた。その結果社交性と社會性を同一の個人意識的狀態であるとなし、社會意識は畢竟個人意識の一狀態であると見做すに至つた。

社會現象の
起因の研究の

社會學小史

110

社會の心理的考察は、如上根本現象の討究の外に、社會現象の起因の探究にも向つた。即ちヨードの思想と同じく目的觀念を以て社會に特異なものと爲すものがある。シタイン (Ludwig Stein) の

「哲學より見たる社會問題」 (Soziale Frage im Lichte der Philosophie, 1903) に於ける研究の如きは是れである。シタインは有機體にあつては部分の分解は體の滅亡を來すに反して、社會にあつては空間的俱在及び時間的繼起を離れて獨立がある。これ社會はこの二者より獨立せる意志團體であつて意識的聯合である。有機體の如き無意識的結合ではない。その結合の基礎は目的にあるのである。社會は目的觀念の體系であると説いて居る。スタッケンベルグ (Stuckenberg) は其著

意志團體
目的體系
スタッケン
ベルグ

「社會學序論」 (Introduction to the Theory of Sociology, 1898)

「社會學」 (Sociology: The Science of Human Society, 1903)

等に於ては目的觀念を云はないけれど、ヨードと同じく欲望を以て

社會力とし
ての欲望

社會過程と
現象の基礎

社會現象の起因である即ち社會力であると見做し、この社會力たる欲望の結合が即ち社會だと説くのである。

又社會的過程の中に社會の基礎現象を探究するものがある、ジンメルは社會の成員の相互作用によつて社會の分化が行はれ、以て上位、同位及び下位の三關係を生ずる過程の中に社會の特異現象は生ずるのであると爲し、ギディングスも亦社會化の過程を以て、社會現象を説明し得るとしたことは、前に述べた通りである。

利害觀念

又利害の觀念を以て社會現象の起因と爲すものがある。グムプログッチ、ギディングス、ラツェンホーフエル及びスタッケンベルグ等皆多少程度の差はあるけれども、利害の觀念を社會現象の起因であると云ふ意味に於て重要視して居る。

又相互的關係を以て、たとひ社會の特異現象でないとしても、最も重要なものとするのは、社會の心理的考察を主とするもの、概

相互關係

ね一致する所である。勿論此點は社會の生物的研究者に取りても同一であるけれど、心理的考察者は特に之に重きを置いたのである。リンドネルは夙に相互關係に立てる個人の多數がやがて社會である^{と見做して居た} (Ideen z. Psych. d. Mensch., s. 25)。又ミンメルも亦社會の特質が部分の相互關係にあること (Soz. Dikt. s. 12) を確認して居たが、更に此觀念を強めて互助を成す個人の群がやがて社會であると説いたのはタルドであつた (Les Lois de l'évolution P. 64)。スモール (Albion Small) も亦

「一般社會學」 (General Sociology, 1908)

「社會學序論」 (Small and Vincent: Introduction to Sociology, 1894)

等の書物の中で同様の思想を述べて居るし、其他にギディングス、ポールドキン等が皆此觀念に重きを置いて居る。

此目的觀念、利害の關係、及び個人間の相互作用は、共に有機體

スモール

生物學派と
心理學派と

心理的有機體

の概念中から演繹せらるべき者であつて、生物學派の學者とても、之を無視せるではないけれども、此等を個人意識の内容である^{と見做して心理的に解釋し、且つ之に重きを置けるは、社會の心理的考察に於て著しき所である。}換言すれば社會の心理的考察者の多數は社會を以て心理的有機體と爲すのである。ギディングスが社會は物的基礎に立てる心理的有機體である^{と云ふ一義解を與へた如きは、その最も明白に此觀念を表示したものである。}

第九章 社會の心理的考察

其一一 社會意識の研究

社會意識

次に社會意識なるものに關する思想の發達を概観するに、コムト以前は、既に述べた様に内在説と超在説との二説があつたが、コムト以後の社會學者の間に在りては、悉く内在説を取つて居る。たゞその發生及び解釋に關して異説があるのに過ぎない。社會意識の研究はバスタリアンの人類學的社會學に於て既に之を見るを得べきは前に指示した。此他ラツァルス (Lazarus) の

バスタリアン
ラツァルス
シュタインタ
ール

「精神の生活」(Das Leben der Seele)

及びシュタインタール (Steinthal) の

「言語學、歴史及び心理學」(Philologie, Geschichte und Psychologie)

などの如き書物、又は兩氏共同の

リウヰス

「民族心理的研究」(Zeitschrift für Völkerpsychologie)

と稱する雜誌に於て、又はリンドネルの學說やリウヰス (George L. Javes) の

スパンサー

「生命及び心意」(Problem of Life and Mind, 1874)

の如き心理學上の研究によりて助成せられたのである。

共通の總計

スパンサーの社會意識に關する思想は、その超有機體と有機體と

の比較に於て、社會の意識は分散して存すると説いたのを見れば、多數の個人意識の中に存すと爲した者である様に思はれるが、成員たる各個人が皆社會意識を有つて居るとの義であるか、又は各個人意識の總和が即ち社會意識であるとの義であるか、但しは何等かの關係に於てその一部が社會の意識を形づくるの謂であるか、この邊の考は甚だ不明である。然れども氏が各單位即ち個人は大抵同一程度に於て、幸不幸に對する能力を有すと説き、社會には神經中樞即

社會の神經中樞

特殊なる多数の意識

エリ、エンフ

シエフレ

ち知覺機關がないと説いた所から見れば、總和の意味である様である。然るに又社會の統制系統を論ずる際には、立法機關を以て腦に比較して居る。此點から見ると氏は社會意識なるものは個人意識を總體的に見たるもの又は總和でなくて、或る階級にある個人の群の意識を云ひ、その群も亦一局に集中しないで全社會の各部に散在して居ると考へたとも解せらる。氏の社會學は大體生物的的研究であつたに拘らず、説明に於ては屢々個人心理的解釋を加へたが、それでもなほ社會意識に就ては充分の思想を有せなんだ様である。リ、エンフエルトは極端な生物的解釋を以て社會を觀察し、社會の神経系、又はその神経節等の語を以て説明したけれども、充分に社會意識を説明し得たものではない。シエフレは社會の有機體説に於てリ、エンフエルトの如き極端に走らないけれども、未だ生物との類比の説明以外に出づることが出来なかつた、氏は或る種類の社會意識

多数意識の共鳴

社會的生活は心的なり

フリーエ

三様の意識

活動に就ては、或は個人的方法により、或は總體的方法によつて出来るものであると考へ、社會的權威を論ずるや、之を能動的、被動的の二方面に分ち、前者を以て社會中に於て勢力を振つて居る一部の成員に對する一群の人々の共鳴 (Resonanz) 即ち服従又は同意であると見做して居る。(H. n. I. Ste Abteil) 此點から見ると心理學派の或る人の如く、個人的意識の合調コンヤートであると考へて居た様に見える。但し氏は其の研究の方法又は研究の成果に拘はらず、又社會が有機的、物的及び心的の方の結合であるとしたに拘はらず、換言すれば社會はその構成の資料として無機的及び有機的の體を有つて居ると爲したに拘はらず、社會的生活は心的であることを承認した (Lindner 15—23) のである。

同じく生物的有機體説を持すれども、遙かに明瞭な思想を有したのは、フリーエ及びノゴコフである。

反省的意識
と自我

フーイエは有機體を其意識の有様に従つて三類に分けた。第一は意識が混亂せると同時に散在せるものであつて、下等動物の神経系統に見る所である。第二は意識は明瞭であつて、且つ集中したる中樞を有するもので、高等脊椎動物に見る所である。第三は意識は明瞭に存するけれど散在するもの、すなはち人類社會に見るところである。第一類にあつては反省的意識と自我（*me*）とは存することなく、第二類に在てはそれを組織して居る各成素は自我を有せざれども、有機體そのものには自我がある。第三類に至ては成素即ち各個人は自我を有するけれど、一體としては自我を有することが出来ない。その理由は此類の有機體に於ては主觀は多數の個人から成つて居つて、其各個人は各々自己を知り他人を知つて、反省と自由とによつて聯合するからである（*Science soc. contemp.*, pp. 227—246）。然るに一方に於ては一切の有機體は、その發達と共に種々の部分の感覺を共通

意識の集中
と多數

社會心理上
の大難問

一體にして
分離する自
我

契約有機體

ノギコフ

なる知覺機關の中に集中するを常とする。故に自我を有する。又他方に於ては、社會は契約によつて成るものである。契約の觀念は隨意なる個人的意識の多數すなはち別々の意識を豫想する。是に於てか社會心理學は一大難問に遭逢する。即ち有機體としては一の自我を要し、契約體としては數多の自我を要するのである。此難問を解くが爲にフーイエはその契約有機體の説を爲した。社會は契約的有機的なるが故に、同時に自我と凡ての意識とを有するを得るのである。換言すれば、同時に一體にして且つ分離せる自我を有するを得るのである（*Science soc. contemp.*, pp. 100—102）。此契約の意義はなほ研究すべき必要もあるし、且つ氏の觀念力の學說と相關係する處があるが、こゝには略して置く。

ノギコフは社會の有機體説に固執するけれど、而も社會の心意現象に關しては、研究が頗る精細である。蓋し、氏の立場としては社

政府の機能と

エリート

會意識の存在が、やがてその有機體説の成立の證明となるのである。氏が腦の一機能と政府とを比較して、社會有機體の腦の一機能と見るべき政府は、未だ生物の腦ほどに發達して居ないことを説いたのは前に述べた。氏はなほ社會にその中樞(Enkephalon)の譯語に充つ。適譯なし、姑く假りに用ひる)のあるのは、恰かも生物に腦と云ふ中樞のあるのと同様であると見做し、此兩者に對してともに知覺機關即ちサソリウム(sensorium)の語を適用して居る(Comp. of vol. Soc. p. 12) 而して社會有機體に於ける知覺機關は實は社會の全部でなくて、少數の有力者である。故に氏は社會に意識ある事は承認するけれども、此意識はフレイエの見た様に集合的でなくて、むしろ少數有力者の力によつて作られたものとも見ることが出来る。則ちかのロックの説に同じく、又ルボンの群衆心理に説いた所と相似て居る。然らば少數者の意識によつて作られたものが、何故に社會意識と呼ばれるか、

社會の知覺機關

少數有力者の意識

社會心理上の大問題

テード

社會の特別な企劃性

テリック

又何故に社會の意識たり得るかは社會心理學上の大問題の一である。テードはその近著「純正社會學」に於ては前よりも一層社會の心理的方面を重ずるに至つた。氏は一切の現象を自然進化の下にありと爲し、此立場から社會、人及び動物は皆一大過程の成果であると思做し、動物にありては特異な屬性は感情であり、人にあつては知識であつて社會にあつては企劃(achievement)であると爲した。次に活動から見れば、動物、人及び社會は共に全體としての活動である。更に現象から云ふと、他の二者は心的であつて、社會は之に特有なものをも有する。社會的これである。(かくてグムプロヴィッチの説に近づけるやうである)。終りに活動の起因から見れば、人と社會とは共に有目的(telic)であつて、動物の動能的(conative)なのとは異つて居る(Pure Sociology p. 94)と論じて居る。されば氏は社會的現象と心的現象とを別種のものとして爲す様であるけれども、實は然うではない。テード

個人的心意
の綜合

トは社會は成素として人を有するけれども、多數人の複雑なる關係から成つて居るから、之を心的と云ふ語から區別して説いたまゝである。それ故、社會心意は一切の個人的心意の自由なる創造的綜合の結果であると説くのである。こゝに謂ゆる自由な創造的綜合とは社會力としての欲望の結合又はその調和の意味である。

スタッケン
ベルグ
の比喩的用語

グンブロキチ、シタイン及びスタッケンベルグは、社會現象を心理的だと認むることは一樣であるけれども、前の二氏は社會意識を説かない。スタッケンベルグに至ては社會意識の語は比喩的に用ひらるゝものであつて、社會の有機的觀念から來たものであるとなし、議會などの決議の場合を例として、かゝる際に用ひらるゝ心意、意志などの語は、その議員の投票數によつて定まるものであつて、衆心の一致と見るのは不可はないけれども、眞に感じ、眞に考へ又たは意欲するものは、たゞ個人あるのみ (Sociology, pp. 164—166) と論じ

ギディングス
の社會意識の
調和

て居る。すなはち氏が、社會意識は要するに個人意識の内容の一部であると思ふして、客觀的に社會意識を認めない點は、ポールドキンの純主觀的解釋と同様である、と云ふべきである。

相互的心的
交通の結果

ギディングスは社會意識は各個人の意識の調和であり合調 (Concept) であると見做し、その調和又は合調の由りて來る所に就ては、リウキス等の説を承けて、各個人意識の相互的交通及び影響に本づき、各人の意識は社會中に於ては共鳴し得べく發達し來つたものだと思ひ、その個人意識内に於ける状態を云はゞ相互的同類意識であると思ふ (Prin. of Soc. and Theory of Socialization)。此解釋は一面には個人意識の内容として實在の場所を主觀的なりと認め、その活動としては客觀的なるを認められたものであつて、フーイエの説に比して更に一步を進めたものである。然れども個人意識の内容が如何にして客觀的に活動し得るか的過程に至つては竟に明かに説明する所はない。此點

存在活動は主觀
的活動は客觀

民族心理學者

は不充分である。

社會意識の現象を異なる方面から見て研究したのは民族心理學者であつて、バスマチアン、ラツァルス、シタインタールの外に、ギユスタールボン (Gustav Le Bon) の

「民族進化の心理的法則」(Les Lois psychologique de l'evolution des peuples, 1894)

「群衆の心理」(Psychologie des foules, 1895)

「群衆論」(The Crowd)

等の研究及びヴァント (Vundt) の

「民族心理學」(Volkerpsychologie)

の研究によつて漸く進歩發達の途に就いた。又たシゲールはルボンと共に社會意識の變態とも名づくべき群衆心理の研究に専心した。然れども此等の人々もなほ社會意識の現象に就ては、如上叙述の傍

ルボン

ヴァント

シゲール

客觀的説明の不可能

ら指摘せし問題に就ては、充分の解答を與へて居らぬ。特に集合意識を説くヴァントの如きは、社會意識の主觀的解釋を取ることポールドキーンに同様であつて、此立場からしては社會意識の客觀的性質を解釋するの途がない様に思はれる。此點はギヂングスの相互的同類意識の説に於ても同じである。

以上叙し來つた社會の心理的考察の發展に徴しても明かな様に、社會の心理的考察は直ちに心理學的社會學であるとは云へない。社會の心理的考察特に社會意識の研究は、却て生物學的社會觀を有するノギコフやフーイエ等により精微な研究を積まれ、極端な生物學的社會學者リ、エンフェルトに依てもまた社會の心理的考察は試みられた。これと同時に心理學的社會學に屬すべきジンメルやシタインやスタケンベルグ等の人々も、社會意識を説かないのである。特に純主觀的解釋を取るポールドキーンやヴァントの如きすらも亦た同然

心理學的社會學

である。逆まに社會意識の現象のみを對象とする社會心理學の研究を、社會有機體説を固執するノギコフ等の説の中に見出すことが出来る。此歴史的事實は、以て社會の心理的考察と、心理學的社會學及び社會心理學との關係を見るに足りるのである。社會の心理的考察と心理學的社會學及び社會心理學との關係や異同やは、筆を改めて社會學研究の現状を叙するときに説明する。

第十章 社會學研究の現状

上來叙し來つたコムト以後の社會學研究の狀況を見るに、斯學建設の當時或は誤りたる見解から、若しは他の範圍の殆んど同様な既成科學との同一視から、社會學はその當然の對象を有せないかと疑はれた時に於ては、社會有機體説は、その當否に拘はらず、社會學の存在を公認せしむる點から見ても極めて必要であつた。けれども類比の上に建てられた社會有機體説は社會と生物的有機體との類比を見るに急であつて、その差異に關してはやゝ等閑に附した觀があつた。是に於てか極端な生物學との類比をその研究法にまで準用して、こゝに生物學的社會學を生ずるに至つた。然れども有機體説の建設者に在つても夙に認められた様に、此兩者の間には本質上の區別が存するのであつて、此兩者を通じて同じき所は有機體の概念を形づ

有機體の概念の適用の概

社會の特殊性の攻究

社會の結合と意識力

くれる主要觀念に過ぎないのである。乃ち社會有機體説の當否は攻究の對象となり、その差異の次第に明かにせらるゝにつれて、生物有機體との類比は、變じて有機體の概念を社會に適用するに止まることゝなつた。されば、或は社會と有機體との類比は單に比喻だと云ひ、或は然うでない論ずるけれども、それは畢竟程度の問題に過ぎないで、あくまで有機體觀に拘泥するの愚なことは漸く明瞭となり、一轉して社會現象に特有なる性質は何ぞやてふ問題となつた。然るに此問題の研究せらるゝに及んで、社會と生物的有機體との差は、有機體の成素を結合する生理的力に代りて、社會の各成素を結合せしむべき力、及び社會に於ける意識の二問題に歸着す可き事が明にせられ、こゝに社會の心理的考察となり、一方に社會の根本現象もしくはその現象を他のものより區別せしむべき特異性の研究となり、他方には社會意識の研究となつた。而してこの根本現象又は

心理的研究の勃興

心理的研究の起る由

コスト

特異性も亦心理的現象なること明瞭なるに及んで、社會の心理的研究の勃興となり、心理的社會學及び社會心理學の發達を見るに至つた。彼の契約説と云ひ印象説と云ひ模倣説と云ひ同類意識説と云ひ、或は目的觀念、利害の關係、もしくは個人間の相互關係に重きを置ける、或は之を社會的過程に求め、或は之を個人の意識的内容に探り、さては之を民族精神の開展に求むるもの、皆この根本現象を闡明してその理法を明かにせんとするに外ならぬのである。

社會研究の趨勢は今やその心理的研究に集中せらるゝの觀がある。これ必しも社會の唯心論的見地に偏するの結果ではない。なほ昔日の生物的有機體觀を固執する學者にあつても、その研究の方針が心理的たるに至つた所以のものは、社會現象の根本性質が心理的なるに起因する。コスト (Adolph Coste) は其著

「客觀的社會學原理」(Les principes d'une sociologie objective, 1899)

心理的研究
の反對

コ
ストの誤
解

心理的研究
は主觀的
に非社會
的

多數意識
の現象の
相關

に於て心理的研究に反對して、社會の心理的研究は社會學をして政治學や倫理學と混同せしむるの恐れありとし、社會學は事實の學なるを以て其基礎は客觀的實驗的たるべく、主觀的心理學的たるべきでないと反對した。然し之は誤解と偏見とを交ふる議論である。コストは心理的研究はやがて主觀的であると爲すのであるけれど、社會學に於て社會の心理的研究を爲すのは、社會現象を客觀的に見て、其一面に於て物質的基礎を明かにし、その物的性質を研究すると同時に、他の一面に於ては社會現象が他の現象と異なる所以の特質及び有機的結合の原理に代れる社會の結合原理が心理的なるが爲に、それを心理的に研究するに過ぎない。加之社會現象の心理的説明は、個人心理の現象と異り、多數の意識の相關の現象の研究換言すれば社會心理的研究である。氏の言はタルド等の研究の如く社會の心理的方面にのみ局したるもの、若くはボールドキン等の如く個人的意識

心理的研究
は客觀的

社會學研究
法

比較的研究
及び歴史的
研究

統計的研究

の中に社會意識を求めんとするものに對しては、或はこの批難は當つて居やうけれども、社會の心理的研究そのものに對しては妥當の批難でない。社會の心理的研究は、主觀的現象の語を以てする客觀的研究である。個人意識現象の研究たる個人心理學に於てすら、一科の學としてその研究の對象とする意識現象は、之を客觀的と見做すによつて始めて成立する。況んや多數意識の相關の現象の研究たる社會の心理的研究に於てをや。

吾人の見る處を以てすれば社會學の研究法は分つて六種とする。比較的研究、歴史的研究及び統計的研究はその歸納的方法である。スペンサー等の研究が斯學に貢獻したところ及び人類學的研究もしくは社會の自然史的研究は、主として比較的及び歴史的研究の方面である。かくて社會學は此方面に於ては研究やゝ熟せるに近い。ひとり統計的研究はなほ未だ觀るに足らぬ。これ演繹的方法と相俟つ

物質的研究
心理的研究

にあらざれば教示するところが少ないからである。物質的研究、心理的研究及び総合的研究は社會學の演繹的方法である。歸納的方法の任務は資料の供給にある。演繹的方法の任務は原理の開拓である。歸納的方法の三様の研究が齎らせる知識を整理し、之をその基礎たるべき科學の理法により説明して、以て社會的理法を明かにするは其の任務である。

上來述べた様に、社會の生物的物质的研究先づ起り、次に心理的研究起り、今やその隆盛期にある。この生物的研究と心理的研究とを綜合し、更に之を宇宙的原理に還元し、以て純然たる社會的理法を明かにせんことは、総合的研究の使命である。社會の総合的研究が他の二様の研究に後れて起るべきは、恰も社會學が社會的諸科學の進歩の後に起り、生物學が動植物學に後れて起れと同じく、當然の事に屬する。而して総合的研究も亦既にその緒に就いた。先きに

総合的研究
の使命

総合的研究
の現状

ロツス

指摘した様に、総合的研究は既にフォードの「動學的社會學」に始まり、グムブロギッチ、フーイエ、ギディングス、ノキコマ、ラツエンホッフエル及びスタッケンベルグ等によつて試みられた。されど此等の學者にあつてもその造詣に於て大小深淺があつて、或は事實上心理的研究と生物的研究との孰れかを主として他を加味し、若くは兩者の聯立に終れるものもあるけれども、此研究に向つて、進みつゝあるのは現下の狀況である様である。輒近に至てロツス (Elward A. Ross) がいで、其著書に

「社會統制」(Social Control, 1901)

「社會學の基礎」(Foundation of Sociology, 1905)

「社會心理學」(Social Psychology, 1909)

等がある。氏の研究も大體に於て亦社會の心理的研究から起つて此総合的研究に進みつゝある。其他の學者、生物的社会觀を取ると、

スモールの
進歩の現状

心理的社會觀を取ると、はた兩者の間にあるとに論なく、又生物學的社會學を主とすると心理學的社會學を主とするとを問はず、多少皆社會の物的解釋と心的解釋とを統一融合せんとする綜合的研究に着手し始めた。スモールも亦其の「普通社會學」に於て此研究の一端を示して居る。然れども社會の心理的研究はなほ未成である。特に社會意識の客觀性の説明及び其活動の原理に至つては、依然として、未だ開墾の鋤犁がはいつて居らない。その拓殖の成果を得た後でなければ、社會學の最後の任務たる綜合的研究の完成を期することは出来ないのである。近時社會の心理的研究が愈々盛なるは、蓋し自然の數である。コストの説は此現状とその理由とを忘れたと云ふ批難を免がれない様である。

各國に於ける
研究の現
佛國

終りに各國に於ける社會學研究の狀勢を見るに、コムトの本國たる佛國に於ては、コムト風に逝き、タルド近く歿したけれども、老

獨逸及び
大佛國

雄フリーイエはなほ健全である。ルボンも居る。ヂュルケームや、レストラード (Lestrade) や、ボルヂエー (Bordier) や、ヌヌイユ (Councell-Se-nent) や、ヨルムス (René Worms) や、ドモラン (Demolins) などの學者がある。獨逸及び佛國に於てはシエフレ逝き、ラツエンホーフエル歿し、グムプロキツ悲劇に終つたけれども、なほシタインや、ジムメルや、テンニス (Tennis) などの鏘々たる社會學者がある。その外、國家學、經濟學、人類學及び文明史の方面から社會學に参加して貢獻しつつあるものに至つては、當代の碩學鴻儒指を屈するに違がない程である。伊太利に於ては、刑事社會學の研究大に起り、之と共に社會學者も亦少なくない。有名なロンブローゾ (Imbrosio) 博士が最近に歿したが、その系統を受けたるガロフaro (Garofaro) 及びフエリ (Enrico Ferri) がある。フェレロ (Ferrero) や、コラヤンニ (Colajanni) や、ロリア (Loria) や、ヴァカロー (Vacarro) などの如き學

伊太利

英國

者がある。英國に於てはスペンサー長逝の後は、マッケンジーの外は、主として記述的又は文明史的社會學の方面に發達して來て、トモルガン(De Morgan)や、マクレンナン(Mc Lennan)や、ラボック(Lubbock)や、ラング(Andrew Lang)や、タイロル(Tyler)や、ミヂュニス(Jevons)や、フリント(Flint)や、ボザンター夫人(Hellen Bosanquet)等の學者がある。米國に於ては社會學が大に勃興して、スモールを先輩として、ブロード、ギヂングスの如き大家がある。ポールドキン、ロッセ等を始めとして、新方面の研究頗る盛である。其他、モルガン(Morgan)ギンセント(George Vincent)フェアバンクス(Fairbanks)バスキム(Baskin)、ヘンダーソン(Henderson)、サムナー(Sumner)、エルワード(Elwood)、クーレー(Cooley)、ハワード(Howard)パーソン(Parson)テナー(Tenney)等の人々が熱心に研究して居る。其他露國にリ、エルフルトヤブローホ(Bloch)や、ノギコフや、ド・ロベルチー等の學

米國

露國

其他の各國

者がある。其他の諸國に於ては白耳義にドグレイフあり、フィンランドにエステルマルク(Westernmark)があり、其他歐洲の各國はもとより、濠洲及び南米諸國に於ても社會學の研究者が漸く輩出しつゝある。

近時の傾向

特に注目すべきことは、近來に至て社會的諸科學の研究者が、概ね皆社會學に這入つて來る様になつて、學理の根柢を此學の原理に求めんとする傾向を來し、爲めは社會學は其領土を此等諸種の社會的科學の方面に擴張するに至つたことである。

我が日本に於ては故外山博士はじめて社會學の講座を東京帝國大學に擔任したこの方、社會學の研究次第に起り、加藤(弘之)博士は主として倫理の方面から、穂積(陳重)博士は法學の方面から、共に社會學的研究に入り、有賀(長雄)博士、浮田(和民)博士なども亦社會學の研究に勉め、現今に於ては建部(遯吾)、遠藤(隆吉)兩博士を初めとして

日本に於ける社會學の研究

新進の學者が斯學の研究に潜心するもの漸く多きを加ふるに至つた。
左に其主として社會學に關する著書を掲げる。

故外山正一著

「山存稿」

加藤弘之著

「強者の權利の競争」

「天則百話」

「加藤弘之講演集」

「道德法律進化之理」

「自然界の三大矛盾と進化」 其他

穗積陳重著

「法典論」

「隱居論」

Ancestor-Worship and Japanese Law (祖先崇拜と日本の法律)

「五人組制度」 其他

有賀長雄著

「社會進化論」

「族制進化論」

「宗教進化論」

「歴史に於ける社會政策」 其他

浮田和民著

「社會學講義」

岸本能武太著

「社會學」

建部逐吾著

「普通社會學」(四卷)

第十章 社會學研究の現状

社會學小史

「理論普通社會學綱領」

「戰爭論」 其他

遠藤隆吉著

「近世社會學」

「支那思想發達史」

「應用社會學講話」

「日本社會學研究所論集」

「社會心理と教育」 其他

小林郁著

「社會心理學」

「コムト」 其他

小山東助著

「社會進化論」

木山熊次郎著

「社會主義運動史」

小林照郎著

「日本之社會」

江部淳夫著

「文明論」

徳谷豊之助著

「社會心理學」

樋口秀雄著

「社會心理の研究」

「社會學講話」

「社會論叢」

「社會政策と社會主義」

第十章 社會學研究の現狀

社會學小史

一四二

「社會學十回講義」

「社會學小史」其他

社會學小史終

附 錄

社會化論梗概

ギヂングス原著
樋口秀雄抄譯

原著題して『セ、シーオリ、オヴ、ソシアリゼーション』(The Theory of Socialization)と云ふ。社會化の理論の謂なり。千八百九十七年の出版にかゝる。僅々四十頁の小冊子たりと雖、氏が學說の要領悉く此中に存す。「社會化論」はやがて社會學原理の精髓なり。全篇六章二十節より成り、第一章には、合的活動の方式を、第二章には集合を論じ、第三章には聯合を、第四章には社會心意を説き、第五章に社會體制、第六章に制度残存を叙して終れり。

第一章 合的活動の方式 (The modes of purposive Activity)

合的活動

社會化論

一四三

社會化の
意義

先づ社會化作用の意義と題して論じて曰く
 社會化作用の理論は社會學の理論中最も重要なる部分に屬するもの。最初に此用語例を作りしはジムナルなるが如し。彼は殊なる科學としての社會學の唯一の目的は、社會化作用、協力作用及聯合作用の形式、勢力、及發達を研究するにありとなしき。さればその謂ふ所社會化作用とは明に社會團體の形成及聯合作用の發達を主とす。爰に用ゐるは之と異なり、社會の中に相聯合する個人の心裡に於ける社會的性質即性格の發達を指して云ふなり。別語を以てせば個人心意の社會的狀態を意味す。されば社會的作用と云ふは畢竟聯合作用并に社會的團體形成の結果にして、聯合作用の發達せる形式の原因たりと云ふべし。

吾人人類の實際的活動を爲すに當り、主要なる過程四あり。社會化作用は即ち一たるのみ。

四大過程

評價

利用

性格化

四大過程とは何ぞ。評價、利用、應化及び社會化の作用これ也。意識あるものに取りて、最初の生活過程は吾人を圍繞する世界即ち外界の事物に接して之を熟知するにあり。換言せば外界の知識と之より來るべき快樂とを獲得して、之が價値を認むるにあり。此の如くして外界事物より知識を得、感情を呼起すを得て、外界を熟知する作用を評價(Appreciation)と稱す。

第二の生活過程は熟知せる外界の事物をして吾人に適應せしめんと勉むるにあり。即ち彼等をして吾人に有用ならしむるにあり。思慮ある、秩序ある方法により外界事物を吾人に適應せしむる作用を利用(Utilization)とす。

實際的生活過程の第三を應化又は性格化(Characterization)作用となす。既に外界の事物を熟知し、之を利用するに至て、幾多困難に逢着するを見る。吾人はその望む所に従ひ、出來得る限の方法により外

應化

界を以て吾人の利用に任せしめんと欲す。然るに事物の性質と、人力の限りあることは萬般の事物を吾人が意のままに變化せしむるを許さず。是に於てか吾人は一方に利用の道を講ずるとも、他方には自家をして外界に適應せしめんとするに至る。(その事必しも意識的にしか試むるのみにあらず、無意識的に自然的にしかすること亦多し)されば應化作用は一には利用と相反する作用にして、二には事物の困難に避易せずして、却てその戮力を致し、三には自家を統制するものと云ふべし。此等の種々の點を總じて外界に吾人を適應せしむる作用を應化と稱す。

(註)ギ氏はこゝに性格化とも直譯すべき語を用ゐたり。これ外界に對して自己を適應せしめんと勉むる結果は、やがて自己の性質を變せしめ、こゝにおのづから性格の陶冶せられ形成せらるゝが故に、その結果の側より看來りてカラクテリゼーションで

社會化

ふ名を與へしなるべし。されどその主として現はす所の義は、詮するに自己の適應は外ならぬこと如上の言に見て明なり。余の應化なる語面を用ゐて憚らざりしはこの故のみ。(一)内の數行は余の縦まゝに著者の説を推演して加へたるもの、潜越の譏は甘ずべしと雖、爲に原義を誤らざるべきは自から信ずる所。

第四の過程は即ち吾人相互の適應なり。互に適應してその結果互に社會的と呼ぶべき部分を増加し來る。この過程も他の過程とおなじく、小兒時代より見らるゝ所にして、兒童外界に親炙し之を知熟すると共に又他人と相識るに至る。母、乳母、父兄弟または姉妹の知得に始まり、學校生活に入り、更に之を出で、謂はゆる社交を營むに至りて、この過程はいよく著るしく見るを得べし。他人と相識るや、その異同を判別し、好悪を生じ、反情及友情を生じ來り、次では好む所に交はり、輯睦し、聯合するの快を覺え、是によりて

愈社會化的傾向を増加するものとす。相互に相識り、従つて、同情及友情を生じ、事業に於て互に聯合し、協力するに至る過程を社會化と稱す。

社會化の過程は評價と共に始まる。されど其始に於ては他の過程の如く著しからず。又之より利益と快樂とを得んが爲に之を發達せしめんと勉むることなし。かゝる状態に達するは評價、利用及應化の諸作用が一定の度に發達せる後にあり。

是等四大過程は各特殊なる科學により分析せられ、組織せらる。評價の作用は心理學により、利用は經濟學により應化は倫理學により、社會化作用は社會學によりて分析せられ、組織せらる。

されど具體的科學として心理學は評價以外のものを含むは勿論、社會學も亦社會化以外のものに涉るは云ふを俟たず。

第二章 集合

四大過程と
四科學

集合

物的基礎

社會の物的基礎——社會化作用の存する前、まづ個人の集合なかるべからず。之ありて始めて、その間に相識と聯合との見らるゝあり。社會の物的基礎は即ち個人なり。されど人類の集合を規定する主たる條件は物的外圍中に認めらるべく、集合の原因は群團の生成し聚積する方式中に見らる。集合の外延及方式と民象の活動とは物質進化の理法に合すべき現象なりとす。

第三章 聯合 (Association)

闘争およびその動力

社會中に集合せる個人の間、多少の等質（類似）あるに非ずんば、社會化作用は決して見らるべからず、此なきとき、凡ての關係は背反的たるに過ぎず。

之を事實に徴して攷ふるに一切の活動的關係は闘争の法式たり。活動は實に闘争に始まるもの、如く、而して根本的闘争の激甚なる、

闘争

社會化論

一次的

二次的

相闘争するものゝ一が破壊、死亡、若くは屈從するに至るまで止まず。之を初期的又は一次的闘争と稱す。かゝる状態を過ぐれば闘争は寛和となり、一方の絶滅に至るに及ばずして、或は部分の改新にといまり、或は構成又は性質の變化若くは運動又は活動の變更に終る。これ一次的闘争により生せられ又はこれに導かれたる結果なり。此を二次的闘争と稱す。彼の肉食動物間に於ける闘争の如きは一次的なり。彼等の間に於ける、その類同じからず。力等しからず。相互の敵對はむしろ常態と云べし。されば一次的闘争の比較的少きに至るは、只其類を同らし、殆んどその力を等うする生類の間に於てこれあるのみ。即ち社會化作用の起るは、此の如き生類に於てのみこれあり。換言すれば、社會化作用は二次的闘争なり。

類に於て大同なれども、力に於て甚しき懸隔ある生類の間にありては、評價、利用及び應化の動力を通じて一次的闘争のなほ繼續す

動力と方法

るを常とす。その動力の大異を列舉せば左の如し。

生活過程

主たる動力

主なる方法

評價

官能的快樂
賞嘆の情
好奇心

模倣

利用

體欲

襲撃
感銘
模倣
發明

應化

倫理的自我満足

適應
固執
克己

類同の法式

類同の法式

意識あるものゝ集合せるが中に見らるゝ類似に種々の法式あり。

社會化論

同族

その各法式中また程度の差あり。主たるもの三つ。一に同族なり。二に心的及び倫理的類似なり。三に可成的類同なり。

同族間の程度と云ふは家族、民性、人種、さては膚色の相似の如き類を指す。人口の統計に依れば、同族の度は、土着の双親により生れたる土着者、他國産の双親により生れたる土着の人、または他國の人、次ぎては同膚色の人なるが如し。

心的及倫理的類似は、詮する所同一の刺激に對する種々なる個人の相似的反應に外ならず。例へば數人の兒童が赤色の美により等しく快感を惹起しぬとせば、彼等の間は此點に於て心的類同の存するなり。幾百の民衆が戦争の噂に恐れて彼等の公債を賣り、或は政治上の弊に耐へずして改革を叫ぶが如きは、彼等の間に、夫れくの點に關して、心的類同を有するものと云ふべし。同一刺激に對する同様の反應は明かに區別せらるべき三つの段階を通じて發達す。(一)

心的及倫理的類似

反應の三種類

原生的反應即ち最初のものは繼續して存することあり、又せざることなり。(二)固執的反應即ち前者に次で起るものは、發して制度となる。慣習又は性僻の如し。(三)合理的反應は三段階の最終にして、心意作用の複雑なる活動、目的に對する手段の種々なる調攝等を含み、人々その心意作用を異にするにつれて亦自ら別あり。されば心的及倫理的反應に於て全く類似せるものありとせば、そは心的及道徳的力の實質的同一を示すと見るを得べし。

可成的類同

(三)可成的類同とは何ぞ。多少異なる個人が同一の事情の下、又は相互の勢力の爲にいよゝ同様になり行くべき能力を云ふなり。他語もて云はゞ型式タイプ又は理想に向うて接近する能力、及び同化の能力なりとす。

これ等三者の個人又は社會にとり重要な旨趣を云はゞ、同族は過去に干し、心的及び倫理的類似は主として現在に關し、可成的類

類意識

同は將來に關する點にありて存す。
類意識

社會的集合中にある各個人の知能が、異同を辨じ得るに至るまで發達するときは、その注意は先づ自己と他人との間の差異に向ふ。若し普通に同種の個體間に見らるゝ如き心的及道德的類似の存するときは、こゝに這般普遍なる類同に關する普遍なる知覺の現存するを見るべし。若しそれ同族中の個體に見らるゝが如き類同の存する場合に於てはなほさらなり。

異同の知覺

集合中にある各個人は同一刺激に對して同様に反應すべきことは既に假定せる所、而して一切の意識あるものに於ては、その心的過程は漸次に、刺激と（そが反應たる）活動と、及び（之に催起せらるゝ）感情との間に慣習的關係を惹起するが故に、此等同様なる各個人は同一事情の下に同一なる感情を有するに至るべし。且また一

同情

人の行動は、その他人に知覺せらるゝに當り、心理的聯合の種々の過程を経て、被働者の心裡に能働者の心に存するが如き多少の感情を喚起するに至る。こゝに知るべし。相類する各個人間には明かに同情の存することを。

同じき前提よりして、相類せざるものゝ間よりは相似たるものゝ間に、一きは強き好情ライキンシの存するが常なるべきこと亦知るを得べし。（こゝに相似たると云ひ相類すると云ふはもとより現實的類似の義なり）されど可成的類同の主要なるは、決して現實の夫に讓るべくもわらず。そは好情又は愛情の基礎たるが爲なり。一見甚だ異れるが如き個人間に、濃かなる愛情の生ずる事例は吾人の屢見る所なるが、斯る場合に在ては、これ等相似ざるものはその互に缺く所のものを他に與へて相補ふものなりと稱せらる。（これ前述の論に反するが如くなれど實は然らず。）吾人の説明をして更に一步進ましめば、相親

可成的類同の力

める双方の者は現に自己の有する所、之を他に施し、他の有する所、之を己に取り、かくしていよ、相類するに至るものなること、容易に見るを得べし。相補ふこと愈多きに隨て、その同化すること亦益易し。即ち彼等は可成的類同の多くを有すと云ふべきなり。此の如き可成的類同こそ實に前陳の事例に於ける愛情の原因たるなれ。外見上の相異が其原因たるには非ず。

欲望

個人が種族に於て他人が自己に類し、心的及道德的性質に於ても亦己に似るを知覺し、而して自から彼に對して同情と好情とを有するに至るときは、必ずや己れ亦彼によりて（同類なることを）承認せられ、又彼より同情及好情を得んの欲望を感ずべし、この他に承認せられんとする欲望は、實に、虚榮、誇、大望、ほまれの愛、尊敬及名譽の欲望の淵源たり。

類同の知覺と同情と好情と被認の欲望とが結合せる意識状態を指

類意識の内容

して類意識と呼ぶ。

類同の知覺

類意識 同情（好情、愛情等を含めて）

被認の欲望

類意識こそ眞に社會的心意状態にして、非社會的もしくは反社會的心意状態より區別せらるべし。

類意識は最簡もしくは根本的なる社會的心意状態なりとす。換言せば最簡のものとして見らるべき社會的心意状態は非我中に於ける自家影像の同情的理解なり。（謂ふところは他人の中に自己と同一なるものゝ存することを感得することなり。）

不断の變化

類意識は常に變化する所の心意状態ならざるべからず。而してその變化は其事情の變遷に伴うて生ず。類意識の外延が増大するにつれて強度は逆に減少し、其外延の縮小するに隨て却て強度を増加す。

同情律

若し同情てふ語が類意識に含まるべき一切の感情を總稱する總體名辭たるを許さば、同情律は左の如けむ。

同情の度は類同の普遍性が増加するに隨うて減少す。

例へば同情の度は同一國民間に於けるよりは同一家族間に於て強く、同一種族の各人間に於けるよりは更に同一民性のものゝ間に強きが如き即ちこれなり。

同情の度は一切の類同法式の總和の變數なり。而してその一法式の變數にはあらず。之を數學的に示さば $S = \phi(k, m, v)$

此公式にありて s は同情を示し、 k は同族を、 m は心的及道德的類似を、 v は可成的類同を表す。而して s と他の三者との關係を表はすに ϕ を以てす。

社●會●化●力●

社會化力

類意識は主なる社會化力にして、個人的の力の凡てを變化し且つ

制限す。社會化力とは社會的目的に向うて働く力量又は勢力にして、聯合を創造し、社會的性質を作り、社會組織を完成するもの實に此なり。或は社會外に存し或は社會の内に起る。

體●欲●及●び●欲●望●の●變●化

類意識は體欲及び欲望を變化す。吾人々類が體欲及欲望中には、吾人が（他人と共同生存を營ますして）只自然界に接し、下等なる生活形式中に獨棲する場合（假りにさる事ありとして）に見得べきが如き自然的のもの殆んどあるなし。一人珍味を求め得て、之を嗜めば他も亦直ちに之に倣ひ、一波忽ち全池に及びて、遂に全集合（社會）をして之が影響を蒙らしむ。かくして凡ての體欲も社會化なる特質を帶ぶるに至る。例へば煙草の使用者は生來之を知るに非ずして、學んで而る後之を喫するを知るなり。概して云はゞ生活の準繩は類意識に制約せらるゝこと多し。

觀●念●の●變●化

類意識はまた倫理的・自然満足の意識に入り來る所の觀念及欲望を

愛情と献身

變化す。剛膽と云ひ勇氣と云ふが如きもの皆同輩感又は名譽心などの爲に強めらるゝこと多し、而して後者は先きに云へりし如く社會的生活の果にして類意識に本づくものなり。此他類意識は新たなる觀念を附與す。親切と云ひ、さては戀愛と云ふものは是なり。此等新動力は行爲の新法式中に發現す、献身これなり、愛情と献身とは恐らくは精神物理學的同情に本づくなるべし。

恐怖及び妄

類意識はまた印象を變化す。抑も印象は二様の異なる果を生ず。一に恐怖、二に妄覺。類意識が印象の恐怖を生ずる法式に及ぼす効果は之を滅殺するにあり。奇異の感は恐怖を起さしむる主なる元素なり。而してこは類同の發見により消滅すべし。類意識が妄覺を惹起する印象の法式に及ぼす効果は歸依心を強むるにありて存す。

摸倣と類意

類意識は又摸倣を變化す。吾人の物を摸倣するや。一切の物に對して齊一なるにあらず。他の事情にして同くば、吾人は自己と同一種

社會化學力

類又は同一範圍に於て創意ある人の爲す所に倣ふが常なり。政治家は政治學者を學ばずして大政治家に倣ひ、印象派はメンテを摸せず寫實派はヴェーラを學ばざるが如し。摸倣は遂に社會現象を他より區別し得ざること以て知るべし。

上來述べたる如く個人的動力は凡て類意識により制約せられ變化せられ、かくして社會化力となり來る。

協力

協力 (Cooperation)

個人の集合體に於ては、種々の相異はありとも、多少の積極的類同と類意識のある所には又必ず交通あり。これを社會化作用の第一歩となす。

交通にして不定に繼續せば、聯合乃ち成り、同化乃ち起る。されど非常に相異せる、不等なるものを排除して、次第に同化し、接近し、相異を滅殺し、以て寛容の衡平を得るに至るまで鬭争は依然と

生活力階級

の結合を支配し、以て生活力の不同を爲さしむ。生活力の階級に三あり。出産率高度にして死亡率の低さを上とし、兩者共に低さを中とし、兩者共に高さを下とす。

人格階級

聯合は又遺傳及び境遇を變化して三つの明白なる人格の階級を作る。即ち天才あるもの常人及び不具なり。

社會階級

聯合は又遺傳及び教育を統制して人格を陶冶し、或ものをして全く社會生活に適應せしめ、他のものをしては稍之に劣る所あらしむ。かくして四つの社會階級は成る。一を社會的のものとす。此階級に在ては類意識充分に發達し、その性向及び能力は共存に積極的貢獻をなさしむ。次は非社會的階級とす。類意識は正常なれども發達せず。從て偏狹なる個人主義に屬するものこれなり。三を偽社會的(生來のものと慣習より來るものとあり)となす。類意識衰退せるものこれなり。爲めに社會的なるが如き性質を假粧するに止り、運命の

犠牲となるを待つ。最後のものは反社會的階級なり。亦本能的なると慣習的なるの兩種の罪人を含む。彼等に於て類意識は絶滅に近く、社會及其の進程はその嫌惡する所たり。

第四章 社會心意及社會統制

社會心意 (Social Mind)

意識的即ち主觀的方面より見れば、同様なる心意が同一なる刺激に對する同時の、同様の反應は、同種的最簡の様式に於て、即ち社會心意たり。社會心意と云ふは、たゞ、聯合せる個人の情、想、さては意志の合調(樂に於ける合奏、音の共鳴の如き)を表示せんため、假に與へられたる便宜上の名に過ぎずして、別に此の如き現象を呈する社會的我又は神秘的超絶的のものあるにあらず。(換言すればヘーゲルが謂ふ所客觀精神オブジェクティブ・スピリットの如きものに異なり)

最簡の様式に於ては前陳の如し。更に發達せる曉に在ては、社會

社會心意

心意は即ち相互的類意識となる。類意識がAなる個人のB、C、D等の他人の面前にあるとき、その心意中に存するに止らで、同時にB、C、D、の心中にも亦存するとき、吾人はこれを相互的なりと稱す。

社會力

社會力 (Social Forces)

社會力とは聯合に基く力なるよしは既に述べつ。されば相互的類意識は社會力の一なりとす。故いかに。相互的類意識が數人の聯合せるもの、情、想および目的の致一なることは上陳の理由により明かなる所、而して件の合同せる情又は想は、共通の態度又は働きを爲すが故に、一個人の力に優るべきこと疑なければなり。

目的ある社會力は必ずや相互的類意識なり。數個人も同時に有する目的は類同の一様式なること既に明なるべし。かゝる目的は、各個人がこれ畢竟聯合せるもの、皆等しく有する所なることを意識す

相互的類意識の勢力

るに至れば、やがて共通の目的に外ならず。各人の此事實を認むるは即ち相互的類意識たること論なけむ。

相互的類意識は進んで應化（矯性應化）の動力を變化するに至る。そは此意識の發達につれて、初めは自負心、或は同情などに基ける事業も、その結果社會に有用のものたるとき、他人の賞賛を受くるをもて、この名譽心は自家の苦痛を忍んで獻身の舉に出づるの念を助長するが故なり。かくして相互的類意識は利他主義を發達せしむ。相互的意識は又更に怯懦及恐怖の念を滅殺するにより、或は更に同情的指導者の勢力を高むるによりて、印象を變化す。

されば相互的類意識の分量増大するや、之と共に類同も亦増加して、以て強制及屈從をして君臨及臣從に、君臨及臣從をして更に勢力及合意に推移せしむるに至る。

是を以て或る社會的團體に於て人種又は民性の如き一般の類似と

強制的
契約的
より

もに人格の大なる不同が伴隨し、又人格相異の著しき感覺により
 苛限せられたる一般の類意識が存する時は、優劣の關係は即ち壓伏
 及屈從若くは君臨及臣從の關係にして、聯合の性質は強制的或は威
 權的たり。若し人格の相異少く、相互的類意識が強大且つ特殊なら
 んか、社會組織の形式は契約的となる。

故に知るべし、社會的關係の繼起の次序は、一に自由、二に平等、
 三に博愛にあらすして、一に類同、二に平等、三に博愛、四に自由
 なることを。

社會的徽號
と標徴

相互的類意識が共通の所有、利害及び觀念の上に働きを及ぼすや、
 その影像表號及名稱をして、社會的徽號及標徴たらしめ、又幾多の
 社會的徽號及標徴をして社會的偶像（渴仰對象）たらしむ。社會的
 徽號とは蠻人の紋章、武人の慄幟、宗教的表號、及び國旗の類にし
 て、社會的標徴とは家族、家庭、階級、宗廟、神佛、祖宗、國土、

社會的偶像

祖國、王皇、軍隊。徒黨、權利、自由、等の類なり。此等が社會的
 徽號たり標徴たるは、各個人の之に對すると同じき思想、感情が聯
 合せる他人に於て亦存在するを意識するの時にあり。他語もて云は
 ゝ相互的類意識の所生たる時にありとす。類意識中の感情の分量加
 はり來て、此等が迷信又は尊崇、敬畏、信心等の對象たるに至れば
 即ち社會的偶像となる。

社會的徽號及標徴は個人の思想及感情をして社會統制に結合せし
 む。社會的徽號標徴は管に之を見聞する個人をして、それが表示する
 物に留意せしめ及び多少の感情を惹起せしむるのみならず、又その
 惹起せる感情及之が他人を鼓舞して爲さしむるの行爲の上に注目せ
 しむ。個人に自覺せられたる他人の感情及行爲は直ちに又その徽號
 標徴のもとの効果と混じ、一勢力としてその個人の上に作用するに
 至る。此新勢力は或は社會的表號の當初の力を強め或は之を弱から

社會統制

しめ、或個人の反動的動作を早からしめ、或は又之を制抑す。かくて社會的表號の手を假りて、此勢力が社會を激して惹起する所の思想及感情の全量をして各個人を統制する力たらしむ。

社會統制はその最簡の様式にありては印象、同情、及模倣を通じて現はるゝを見る。

その發達するや相互的類意識は社會自覺となる。此社會自覺てふ語も亦社會心意に於けるが如く、超越的又は純理哲學者旨趣を有するにはあらず。詮するにこれ多數の個人により、相互の自覺状態が比較せられたる、非常に複雑なる一現象を表示すべき便宜の名稱たるに過ぎず。さて各個人がその相互の思想感情に於て一致するものあるを悟るに至ては自己及びその聯合者が同一の斷案に到達すべきことを充分に意識して行動す。従てその行動も亦一様なるべし。社會的自覺は論議により發達し、輿論の中に見はる。

社會的自覺

社會選擇の法則

過去時代の輿論は保存せられて謂ゆる傳説の中に在り。

社會的自覺は所謂標準、法典、政策、理想、趣味、忠義、信條及主義などの中に傳説と新思想とを結合せしむ。

社會的自覺は又這般社會心意の所産と欲望の種々の様式とを結合せしめてこゝに社會的價值を生せしめ、又社會的偶像を化して合理的に考へられたる社會的價值たらしむ。

社會選擇の法則

社會的價值は合理的社會選擇を規定す。

社會心意が合理的に決定をなし（即ち選擇し）得るは、只群衆即ち集合が代るゝ、集散離合して、以て各個人をして種々變移する勢力の下に來らしめ、新思想は暗示と行動との間に介在して、感激せる行爲又は單なる模倣を妨ぐる場合に於てのみ。

社會選擇の法則に二様の大別あり。

目的選擇の
法則

(一)成就せらるべき目的選擇の法則は次の如し
 一切の社會選擇の中、最も勢力ある理想は個人的力又は本
 來の意義に於ての徳の理想なり、之に次ぐを快樂的又は巧
 利的理想となす。勢力の最も弱きは自己實現の理想たり。
 されど心的進化繼續すとせば高尚なる理想は倍ます勢力を
 増加し行くべし。

社會手段の
法則

(二)結合手段の法則は次の如し。
 僅少なりとも調和して結合せる利害を有する民衆はその選
 擇に於て保守的なり。之に反して調和して結合せざる種々
 の利害を有する民衆はその選擇に於て急進的なり。多々の、
 種々の、調和して結合せる利害を有する民衆のみたゞ程よ
 く進歩的なる選擇を能くし得べし。

第五章 社會體制 (Social Organization)

制度

●制度 (Institutions)

社會的關係の保存及完成の爲め、且つは理想の爲めに、社會心意
 は制度を創造す。

制度は社會關係或は組織の形式にして、社會的に權威を與へられ
 及び制裁せらるゝものなり。社會團體及び合的の聯合の制度は分れ
 て社會體制の二大形式となる。一を社會合成コムポジションと云ひ他を社會構成ソシヤル・コンストラクションと
 呼ぶ。

社會合成とは小團の結合して漸次大となれるものにして、その各
 團は必要あらば自ら獨立し得るまでに完成具足せるものなり。社會
 構成はこれに異り、殊化又は分業の原理に本ける社會の組織たり。

權威と自由

●權威及び自由 (Authority and Liberty)

社會統制が國家てふ權威的社會組織中に發現し、政府の諸機關に
 よりて行動するときは即ち主權たり。

政治的たるを否とを論せず、社會制度が各個に對する關係は、その成員中著き類の相異と著き不同との存する時は、強制的たるべし。此原理は教會的組織に於て明かに認め得る所なり。

社會に於ける一般の民衆が四海同胞的觀念に富み、又心的及道德的に殆んど平等なるときは、制度の個人に對する關係は寛大にして、個人の自由なる行動を許すに至る。

心的道德的類同及び四海同胞の念が確立するに至るは、只外部事情の類似并にその事情の平等様式が多少維持せらるゝ時にあるのみ。近世の民政的理想中に入り來れる平等様式にして、社會學理より見ても亦民政的施設の成效に必用なるべきもの次の數條を數ふべし。

平等の様式

- (一) 政治的平等
- (二) 法律の眼より見たる平等
- (三) 能力に應じて公務に従事し得べき平等

(四) 公開場又は公の運搬設備に於ける權利の平等

(五) 衛生に干する事項の平等

(六) 散齋及修養の手段を享受し得べき便宜の平等

(七) 初步教育を受くべき便宜の平等

(八) 公平なる待遇を受くべき平等

(九) 禮義の平等

(十) 各人に對する好意の平等

制度は善惡となく一切の社會的機能の上に反動す。特に最上の社會的機能即ち人格發達の上に反動を逞うす。

第六章 制度の殘存 (Survival of Institutions)

社會に於ける自然淘汰

自然淘汰

社會的に選擇せられたるものと雖も、必しも長へに存続すとは云ふ可からず。幾多社會的規則及形式も一度社會によりて允可せられ

たるに拘らず、只記憶に存するに止まれるものあり。幾百の法文や、制度や、またく消滅せしものあり。現存せる社會的價值及設備こそ只殘存せるものとは云ふべけれ。

制度の生滅

社會が生み出でしものも、時としては、これを産出せし人種社會さては階級の消滅によりて、消え失せしことあり。されど通常には社會關係や、形式や、法律や、制度や、その消滅するは、主として、之を保持せんと企てし人々の恬淡及過失による。政治的、產業的、宗教的その他の聯合はその成員の減少によりて滅するを常とす。法は社會の之を閉却するに迨び徒法空文となる。

之に反して社會形式、法律、制度などの殘存するは、此等のものが能く之を強行し、維持するを得べき個人の利益及忠誠を繋ぐを得るの力に依る。畢竟するに、かゝる個人を利し、又その忠誠を致さしむる力は、實利に出づ。

如是にして、形式、法律、及び制度の殘存絶滅は全く自然淘汰たり。自然淘汰と云へば、本義に於てもとより個體間の生存競争より來れる適者殘存の謂なりと雖も、人種間、團體間、に於て亦同様の過程を見るを得べし。こゝに用ゐしは後の意義による。されば謂へる所自然淘汰とは適應機能の高下優劣の果たる、適者の殘存と見て可なり。

殘存の法則

殘存の法則 (Law of Survival)

制度又は生活機關による機能の做爲が充分の成果ありや否やは常に變ずる外圍に適應するの巧拙に依る。

されば社會的利益及關係即ち形式、法律制度などの殘存の法則は次の如し。

社會的評價及關係にして、新利益及新關係の加はり來るにつれいよゝ複雑になると共に、又調和的整合的となりゆく價值及

關係の（全部に對して、その）成分たるときは永續す。
 是に由て之を見れば社會的因果律は物質的過程及宇宙律コスミックローに制約せ
 られたる心理的活動の過程なりと云ふ可し。

社會化論梗概終

明治四十四年八月七日印 刷
 明治四十四年八月十日發 行

社會學小史
 正價 金八拾五錢

著 者 樋 口

東京市神田區錦町二丁目

發行者 宮 下 松 太 郎

東京市京橋區弓町二十四番地

印刷者 金 子 久 太 郎

東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協印刷株式會社



發行所

東京市神田區錦町二丁目五番地
 振替貯金口座東京三四〇九番

一一松堂書店
 電話本局 三七一七番

文學士 樋口秀雄先生講述

社會學十回講義

菊判上製頗美本
定價壹圓拾錢
郵税金拾錢

學校の寶物。教育家の生命

文部大臣 小松原英太郎閣下述

小松原教育論

菊判上製頗美本
定價金壹圓五拾錢
特價金壹圓參拾錢
郵税金拾貳錢

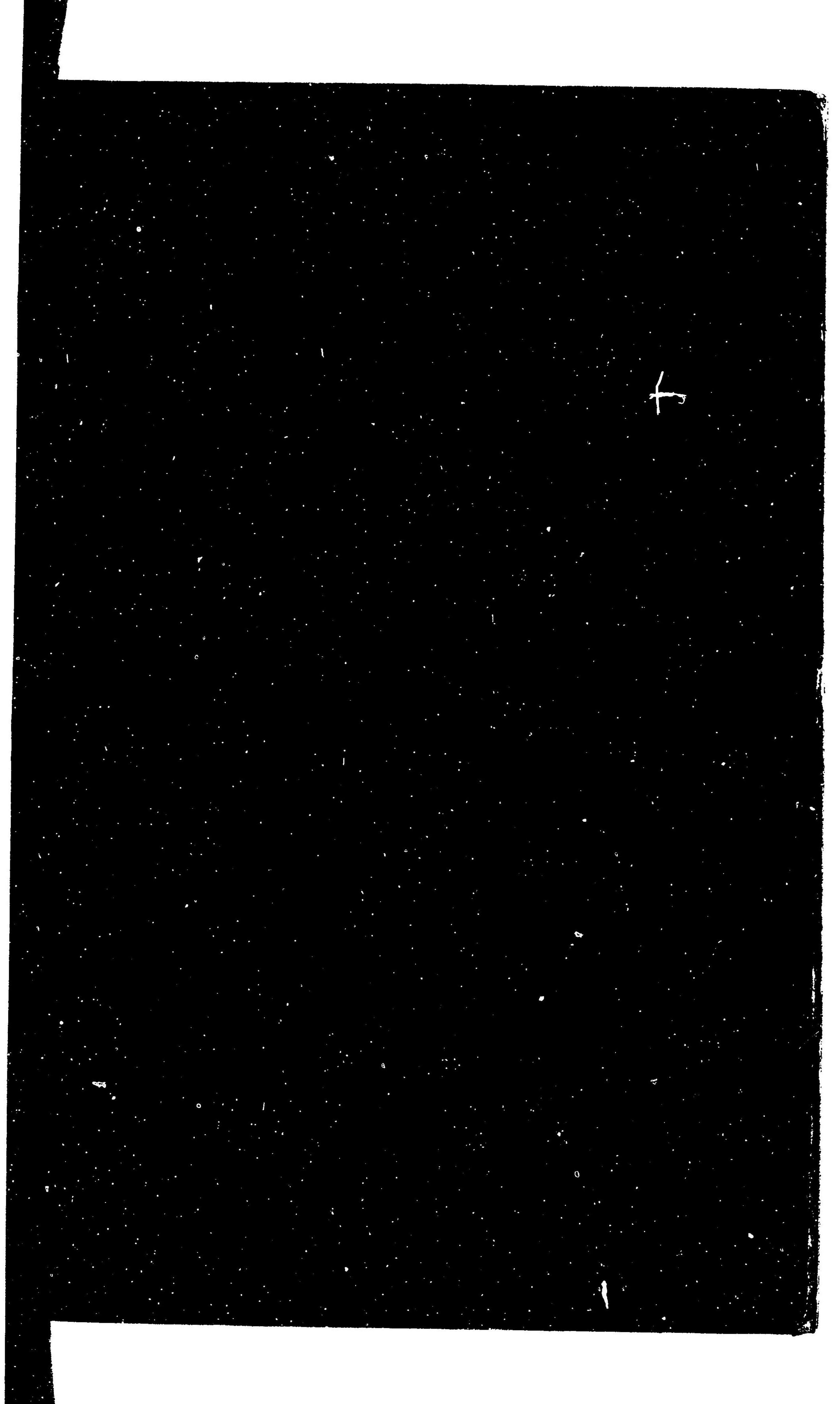
本書は我國現時の教育界を指導すべき一大訓示にして日本全國に於ける教育方針の羅針盤なり苟も教育の任に當る者は必ず本書を備ふべし

發行所

東京市神田區錦町二丁目五番地
振替貯金口座東京三四〇九番

一一松堂書店

335
257



039559-000-3

335-257

社会学小史

樋口 秀雄/著

M44.8

BDA-0121



